毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢



明治三十年七月廿五日發兌

第百六號

口繪＝同情圖（寫眞銅版）
社說＝驕兒と繼子
文藝＝田園雜興（七）

詩人ゲーテの母　稻澤英子
無花果と怠惰者　松ケ枝女史
猫の仇討（下）　園部紫嬌
山むぐら（四）　太田玉茗

家政＝婦人小兒衞生鎖談、婦女子と運動及早起、小兒の啼泣、怜悧、血液、步行入浴、强壯、羅馬の浴室、我國の入浴夏日の飲料水乳房の注意、改良竈等
手藝案内＝置物敷編物
其他社交一斑＝寄書百珍＝雜錄＝交詢等

毎月二回 家庭雜誌 十日廿五日

定價壹冊五錢拾二冊五拾五錢郵稅壹冊五厘宛

夏期大附錄（八月十日發行）

次號發行即ち第百七號には例年の通り夏期大附錄を附し避暑の侶伴たるべし

濱邊の夕景色（木版色刷）　久保田米僊

夏の月（小説）　德富蘆花

可憐兒（小説）　宮崎湖處子

十一羽の鶴（獨逸お伽噺）　稻澤英子

孔雀（翻譯）　金子春夢

發行所　東京日吉町　家庭雜誌社

○小兒○はよく肥へて笑ひ顏の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味掛きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飮み易く且つ味ひよく製造したる

スコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見るべし

特に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なる

スコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臓を強くして活力を與ふることと實に驚くべし●◎●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を益することと實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を増し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す



左の大取次所の外各藥舖にて發捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝 境町	鳥居德兵衛
仝 太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝 室町	資生堂
仝 本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝 道修町二丁目	武田長兵衛
仝 道修町三丁目	田邊五兵衛
仝 道修町二丁目	田畑利兵衛
仝 道修町二丁目	福田清右衛門
仝 道修町二丁目	鹽野儀三郎

新刊發賣!!

教育家必讀!!!

森有禮

定價十二錢 郵税二錢

批評一斑

●讀賣● 文部の局に當りて能く其任に適ひ教育時業を振興したる者世人森井上の二子を稱す而して文部今日の紊亂を見るに當りて志士當に肖二子を追想せずんばあらず此時に當りて此著あるは寔に偶然に非るを認むるなり本著幼年時代歐米游學時代は少壯者をして奮起せしむるに足り廢刀論は子の氣節先見を稱嘆せしめ清國公使として李鴻章との談判快哉を三呼せしむ子が入閣後の教育主義を說く頗ろ簡なりと雖も彼が施措の因て來る所を知らしむるに滿足なり讀で憲法發布の日兇豎の爲に刺せらるゝに至りては巻を覆ふて三嘆せずんばあらず

●日本● 海門山人の著とす有禮の幼時より暴死に至る間を叙し縱横に觀察し來る盡し森氏も亦一時の傑となすに足るもの此人物論興味無きにあらず、

●日日● 海山門人の著なり布衣白面孤影飄然として郷關を出で苟も同郷先輩の引援によらず二十餘年廟相の位に在り天下をして其風を想望せしめし一偉物を紹介し非せて其身邊の雲霧を排せん爲に著したるものなり其幼時より草を追ふて彼が暴死に及ぼし終に總評して直截彼を斷ず其卷末左の一句あり人生死なきはなし死又惜しむに足らず願くは此高遠の魂魄永く教育の精神となり以て能く今日の教育界を掃刷せよと有志乎無志乎吾人今日此偉物を思ふ切なり

●大阪毎日● 文明の誘導者として文政の創始者として明治の一元勳たる森有禮は確かに近世の一偉人たるに相違なきなり然れども彼は跌宕崢嶸不世出の才略を有すると同時に多くの缺點をも有したりしなり本書の彼を評論する其賞すべきを見て其難ずべきを知らざるもの丶如く所謂傳記編者の通患たる本尊崇拜病に罹れるを免れずと雖もまた一讀彼を知るものなきにあらざるなり

發行所 東京日吉町 民友社

THE FAR EAST,

AN ENGLISH EDITION OF THE KOKUMIN-NO-TOMO.

PUBLISHED MONTHLY.

英文國民之友 極東 毎月一回發兌

七月廿日發行 第二卷第七冊目次

口繪

函山の雨話(蘆の湖、塔の澤)

社説

米布合併

日本陸海軍の進歩(佛文)

特別寄書 人見一太郎

歴史の研究に就て(東洋學者の立脚點) 浮田和民

日本の商業的道德 ヘンリー、ジエー、デビソン

日本商工の將來 武富時敏

海外に於ける日本美術 シー、フオンテス

雜錄

花の王國 松本君平

桐一葉 アーサー、ロイド譯

時事 拾數件

定價一冊金拾二錢 一年分前金一圓廿錢 郵税一冊一錢 米國二錢 歐洲四錢

廣告料 一頁一回金五圓 半頁金三圓 一吋金五拾錢 二回以上割引

Subscription: *yen*, 1.20 per annum, in advance. **Postage**: 12 *sen* thoughout Japan, 24 *sen* in America and the ports of the East, 48 *sen* in Europe and the interior cities of China. Single Copeis, 12 *sen* each.

Advertising: one page, *yen* 5.00 each insertion; half a page, *yen* 3.00 each insertion; one inch, 50 *sen* each insertion. Fractions of an inch will be charged as one inch. Special terms for more than one insertion.

OFFICE OF THE KOKUMIN-NO-TOMO,
No 4, HIYOSHICHO, TOKYO, JAPAN.
(TELEPHONE, HONKYOKU 70.)

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

抒情詩

批評一斑

定價貳拾五錢
郵稅四錢

●●●●**教育時論** 作者は、宮崎、田山、松岡、太田、矢崎、國木田の六氏。收むる所は、新體詩を以て作れる抒情詩、往時の所謂新體詩に優る數等。されど所々に挿める序文こそ、新體詩の歷史及新體詩に對する諸氏の意見を徵するに足るなれ。

●●●●**福音新報** 清楚平淡讀みて厭味を覺へず。之を羽衣桂月諸人の詩に比すれば頗る愛すべく又天地の廣きを見る。但惜む所を言へば予はこの詩集を讀みて詩人の性情が予が腦裏に印象を留めたるを覺へず。又詩人が言はんとして言ひ足ざる餘情に感動することなかりき（固よりこの詩集にのみ責むべきにはあらざれど）。概して之を言へはこの詩には戀愛ありて友情なし、悲哀によりて自ら清むる男子の心に乏し。花袋氏の序文に「諸子はこの女性と戀愛との中にある多福の詩人なり」との言は詩人の心に遠きものと謂はざるを得ず。且平淡は可なり、然れども平淡の境より穿き門を潛り一路曲折心の機微に入る所なくんば未だ抒情詩の本色を發揮したりと謂ふべからず。この詩集既に一貫せる特色ありとせば之を以て民友社の詩と見做し、この社の人々の信仰思想の程合と思ひ比ぶれば面白き教訓を得ることなきにあらざるべし。

●●●●**山陽新報** 題して抒情詩といふ松岡國男、矢崎おむろ、太田玉茗、宮崎湖處子、田山花袋、國木田哲夫諸氏の新体詩を輯錄したる者にて各作者の自序あり略其意見をも伺ふべく詩亦面白きものあり中に挿む所の論亦美くしく新体詩論の喧しき今の世探く讀む者多かるべし

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

近刊豫告

名家紀行文選

印刷中

青山緑水間の好伴侶、文章獨修者の珍寶

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價
一冊　金五錢　郵稅金五厘
半年（十二冊）前金五十錢　地方郵稅金五十六錢
一年（廿四冊）同金一圓　地方共金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　青崎賢吉　編輯人　金子佐平

本社電話番號本局七十番

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治三十七年七月廿五日發行

家庭雑誌第百六號

目録

口絵

同情圖(湖處子新体歌)……

社説

驕兒と懶子……一

史談

詩人ゲーテの母(其一)……英 子…三

文藝

田園雑興(七)故郷……不二行者…九

談叢

無花果と怠惰者……松ヶ枝女史…一二
猫の仇討(下)……岡部紫嬌…一六

小説

山むぐら(四)……太田玉茗…二一

家政

婦人小兒衛生瑣談……黒田生…二四
婦女子と運動……二四
婦女子と早起……二四
小兒の啼泣……二五
小兒の怜悧……二五
小兒の血液……二六
小兒の頭瘡……二六
小兒と歩行……二六
小兒の衾褥……二六
小兒と入浴……二六
羅馬の浴室……二七
我國の入浴……二七
小兒と强壯……二七
小兒と歯磨粉……二八
夏日の飲料水……二九
乳房の注意……三〇
臺所道具……三〇

手藝案内

置物敷(編物)……三〇

寄書百珍

家庭的避暑法……三五

社交一斑

流行の染……流行子…四一
夏座蒲團……四一
博多單帶……四一
夏羽織の紐……四一

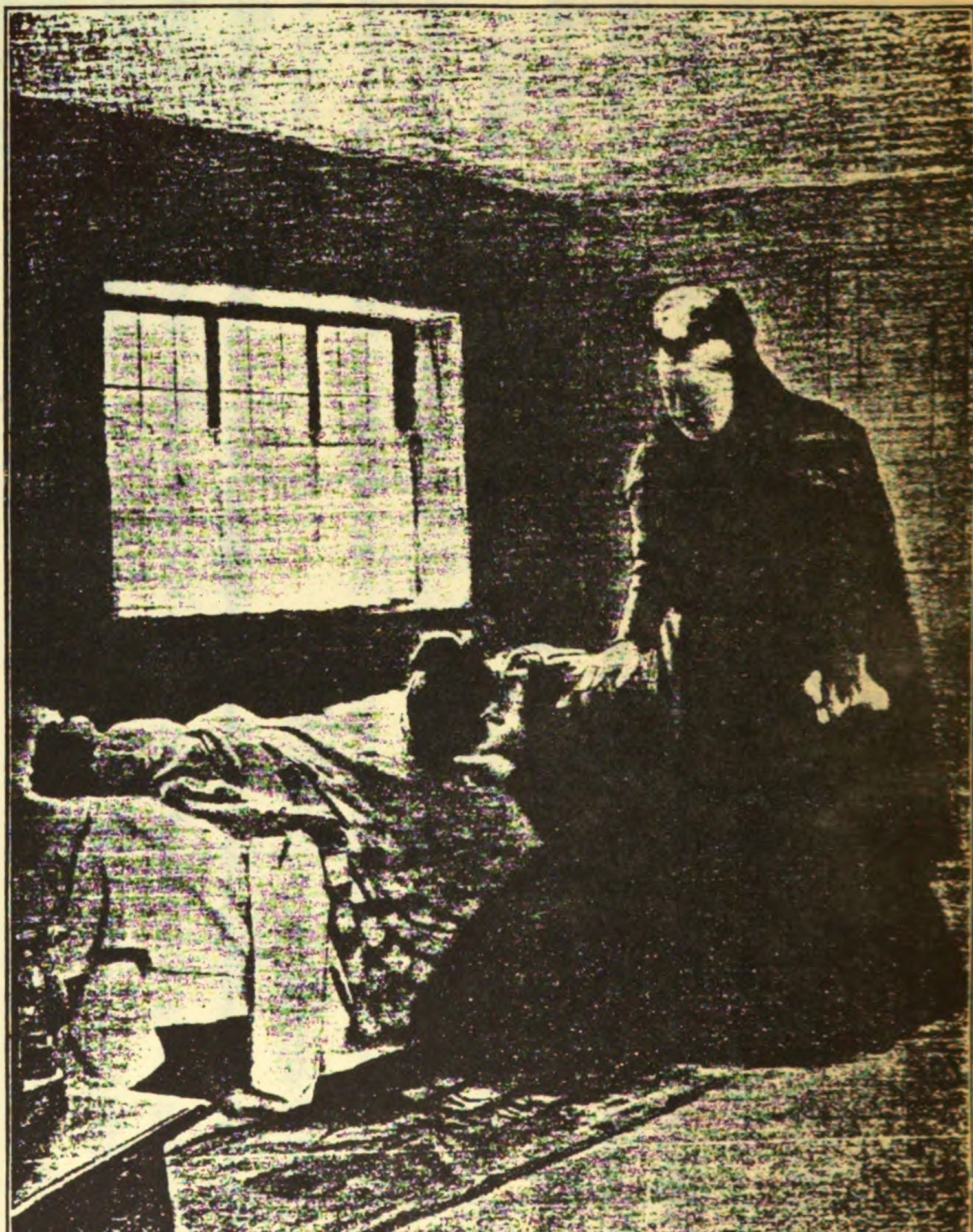
雑録

下女奉行……林 恕哉…四一
婦人矯風會事業(四)……ウイラード女史…四四

交詢

交詢……四六

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



小川一眞製

同情

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

題西畫『同情』圖

湖處子

埴生の小屋のいぶせきに、
思ひもかけずおさづれて、
なげきに沈むしづの女に、
なさけの御手をかけたまふ、
そもいかばかり民艸を、
いつくしみます君ならば。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第百六號

（明治三十年七月廿五日發兌）

社説

驕兒と繼子

此頃の新聞紙は、殆んど毎日のやうに投身、縊死、其他の自殺を傳ふることなるが、斯く不祥なる最後を遂ぐる者は、大抵幼時より我儘に生長したるか、若くは不自然不慈愛なる家に生長したるに原因す。即ち家庭に於て驕兒若くは繼子なりし者が、放縱若くは鬱屈の結果ならずんばあらず。

世間子女の愛に溺るゝの父母多し、如何なる無理を言ふも其意に逆はざらんことを務め、其言ふ所欲する所を遂げしむ。如何なる我儘を行ふも、これを抑制することを知らず、只だ其爲す所に放任す。此の如く權衡なき家庭に生長したるもの、男子ならば、世の中に出でゝ艱苦に耐ゆること能はず、少しく意の如くならぬ事ある毎に、天を怨み人を尤め、自暴自棄し、酒色に沈湎し、借りて返さず、忠言を容れず、監獄に行かざれば、癲狂院に入るなど、實に手の付けやうなきものぞかし。女子も亦然り、人に嫁して、夫に貞なること能はず、舅姑に順なること能はず、買ひ食を爲し、井戸端會議を爲し、窮すれば父母を詐り、兄弟を詐り、心狂ひては自殺を企つるに至るもの滔々皆是れなり。何れか幼時我儘なりし結果ならざらんや。

而して家庭に於ける繼子の生涯に至りては、更に始末に行けぬものなり。驕兒は父母を離れて、天涯に落魄するの時、尙ほ風晨雨夜その父母を懷ひて、流涕し悔悟し感奮興起すること、往々これなきに非ず。繼子に至りては、幼時より愛せらるれば、欺くならんと邪推し、敬せらるれば遠くるならんと僻みたるの習慣、深く骨

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

髓に徹し居りて、何人を見るも信せず、何人に接するも打解けず、白眼を以て萬事を否定し了らんとするなり。

温言を以て懇諭すれば、必ず狎れて侮り、苦言を以て忠告すれば、必ず怒つて抗す。與ふれば遠慮して取らず、與へざれば窃かに盗む。凡そ斯の如きの悪傾向は繼子の通有性にして、そが成長後社會に出でゝ行ふ所も亦毎々此の如し。

一家の主人たるもの、驕兒と繼子の生涯が斯く恐ろしきとを知らば、其子女をして自治の精神を發達せしむるの工夫を爲さざるべからず。自治の精神を發達せしめんには、幼時より子女の所有物は、成るべく彼自身をして處理せしめ、金錢などは豫て物日に若しくは褒賞として與へ置き、子女をして其金錢を以て買物せしむべし。斯くせば驕兒も濫費するとなく、繼子も盗むとなくして濟むやうになるなり。

或は曰く、幼兒をして金錢を所有せしめ、勘定を知らしむれば、慾深くなり、吝嗇となり、規摸卑小となり、鷹揚の氣風を掃盡すべしと。吾人の見る所を以てすれば、大に然らざるものあり、近來の女學生などが、其學校に在るや、父兄の仕送りに贅澤なる衣食を爲し、鷹揚なる交際振りを爲し、人をして彼等世帶持とならば半年に數百圓の負債を爲すにあらざれば、三ヶ月にして破産するならんと杞憂せしむ、而も實際は却て然らず、儉約の度を過ごして卑吝の極に陷り、義理を知らず外聞を顧みざるもの多く、幼時より金錢を出納し、家政に練達したる老婦の遥に鷹揚なるを見ると、其例枚擧に暇あらざるなり。

總て子女なるものは、父母の平生を見習ふ。父母が平生儉素なるも、善く窮困者を救恤し、爲すべき義理を爲し、支拂ふべき金錢は奇麗に支拂ふに於ては、之を見習ふ子女の爭でか感染せざらん。之に反して、如何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

に子女が言ふまゝに多くの物を買ひ與へ、一家打揃ふて、美服美食するとも、借りて返さず、爲すべき義理を爲さず、窮困者を見て平然顧みざる父母ならば、之を見習ふ子女は、決して鷹揚とならずして、刻薄無慈悲となるを免れざるべし。

驕兒と継子の恐るべきを知らば、小兒をして自治せしめよ。吾人の切望する所は是のみ。

史談

詩人ゲーテの母（其一）

英　子

エリサベツト、ゲーテてふ名は、歷史のあらん限り語りつがれん。抑も其の然る所以は、彼の大英雄の妻たりしと、例之ばヨゼフィンのナポレオンに於けるが如くなりし故に非ず、又た自ら大慈善の業に從ひしこと、英のナイシチンゲルの如く、或は其の大勇なる佛のローランの如くありし爲にもあらず。然らば其所以如何に。是れ其生み敎養せる者は、近世の最大詩人なるが爲めなり。即ち彼は實に詩人ゲーテの母たるなり。蓋し人近世の最大詩人は誰なりや、と問はゞ先此のゲーテを擧ぐるに躊躇せざるべし。げに彼は明確にして雄大なる思想家たりしのみならず、又百般の學術に通達し、動植物、鑛物の學と云はず、哲學、美術の理と云はず、皆博く且つ精細に研究して、其蘊奥に通ずる、凡人の比にはあらで、實に神の如くなりし。然るからに古今の人傑中多くは己が一生の成功をあげて、之を其母の敎導の鴻恩に歸し、又眞情を以て、其母を尊崇せざるはなし。ゲーテも亦其一人にて、此大詩人を敎導せる其母の如何なる人なりしやを知るは、唯だに趣味多きとのみならず、いと利益なるとなり。而して此の慈母が生育薫陶せし詩人を知り、其の語る所を聽か

ば、復彌々此の母の人となりを明白にするを得べし。

一、娘　時　代

フランクフルトは其昔獨乙皇帝が、即位の典を擧行せられし有名なる普魯西國の都府なるが、其未だ自由市府にてありける頃、市長にテックストルと云へる人ありけり、詩人の母エリサベットは其長女にて、彼の幼時の家庭教育に關しては明かに知ることを得ざるも、少しく傳はる所によれば、彼は天資快活にして才智に富み、幼より讀書を好み、特に科學書、小説等を愛讀し、獨乙婦人に特有なる、家庭を以て全世界の如く思ふ風に習はず、普通の婦女子に最も重ぜらるゝ家事をつとめず、わけて他の妹等よりも美しき衣服をつけ、華かに身邊を飾ることを好みぬ。故に家人は之を見、戯れに姉宮樣の綽名を下せりとぞ。又彼に驚くべき才ありて、能く事を未發に知ることにさとかりき。曾て父の市長に擧けられし時のことなるが、其日は父の出で行きし後、いつにも勝さり一きはきらめける衣を纒ひ、心を盡して髮をあげ、且つ己れ自ら先むして客室、食堂などをいと華麗に、嚴かに飾りつけ、家の内外至らぬ隈なく掃ひ清めし後、悠然と安樂椅子にもたれ、今しも數多の來賓の入り來るを待つものゝ如し。家人等は其何の意なるを知らず、いと奇異に思ひて問へば、父君の當撰したまふを壽ぶきまつらむ用意にと答へぬ。後刻果して父は同市の市長に撰任せられ、市の參事員等に送られて歸り來りぬ。一人の妹も亦かゝる似寄の性を備へしといふ。又彼は幼より嚴かなる宗教上の教育を授けられしにより、聖經に通し且つ之を愛讀して終生其坐右を離さず、よく其章句を暗んずるばかりに玩味せり。然れども其信仰は後日に至りては、畏敬の念よりも寧ろ感情的に偏したり。其人となり外見を飾るを好まず、心に思ふ處は、場所と、人と、己れの損益如何を顧みずして忌憚なく之を言ひ又は行ひ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き、智育に於てはさまで深からずといへども、婦女子の美德なる柔順てふことは幼なき時より、父母に服從したてまつることによりて敎へられぬ、彼が孫アウクストに(千七百九十八年)に送れる書中に曰く

「汝は祖母よりも多くの有益なる事物を知れりとわれ告白するも、これ我が恥ならず。われ若し汝の如く手紙を書くにまめならんには、わがうけし當時の敎育の悪かりし樣を云ひきかせたるならん。しからば汝は只管神と汝の兩親に感謝するに、汝をして多くの有益なる者、美なる者を見ることを得せしめ玉ひしことを以てすべし」云々と。

彼年漸く長けて十八、容姿婉麗にして、風采氣高く、いと愛すべきの見を備へたるのみならず、父は市長の名擧職にありしとて、遠近の人々より婚姻の申込を受くると甚だ多かりき。時にヨハン、カスパル、ゲーテとて宮中顧問官の職にありし者も亦た申込者の一人なりし。父は此のゲーテを最も望みある人となせしを以て、多數の申込を拒絶して之に嫁せしむることに決しぬ。エリサベットは是れ己が望む所にはあらざりきといへども、渠の美しき性質は、遂に決せしめていふ、何事も父君に任せ、わが爲めに良きを撰み玉ふ深き御心に從ふ、これ兒たるものゝつとめなり、何とて他に煩はしく些細に憂慮すべきことかはとて、眞の愛の紐もて結ばれざる、二十一年も長けたる人に嫁し、フロイライン、エリサベット、テックストルは、フラウ、ラート、ゲーテとなりぬ。時は惟れ一千七百四十八年八月廿日なりき、(今より百五十年前)

二、結婚後の第一年

ヨハン、カスパル、ゲーテは實に大詩人の父なり。其父なる人始めてフランクフルドに來り住み、裁縫と旅宿を兼ね營みたりしが、カスパルは其三男なり。初めの程はいと貧しかりしが、漸々に產を積みて、富有の身

となりぬ。父はカスパルの天資凡ならざるを見て、如何にもして善良なる教育を受けしめんと勉め、法律を學ばしめしが、カスパルも亦た父の意を戴して、專心勉勵し、學業大に進み、遂に法律博士の學位を得たり。由て官に奉任せんとせしかども能はず。直ちに帝に乞ひて、宮中顧問官てふ位階を得て滿足せり。其天性權威ありて、黽勉義務をつとむるヿに堅く、規律整正にして正義を尊び、自己を處するに嚴しく、又自己の言行を以て家法の模範となし、能く家人を薫陶したり。されども性余り嚴格に過ぎて、爲めに情感の温きなく、これがためには其美德も反て過失となりしヿも多かりしぞうたてき。今しばらく此夫婦間に於ける性情を比べんに、著き反對の點も多し、即ち年齡の上よりするも、一方は既に四十男のヿとて、漸く世の辛酸を甞め經、其身の不遇により、厭世勝の傾向を來し。妻たるの人は美はしき花の蕾、未だ雨にも嵐にも染まぬ、一生の中いとも幸多き望を以てる乙女なれば、嫁せる夫は夫といはんよりも、父といはん方寧ろ適當なりし。さはいへ其性諧謔にして又能く夫を尊び、父の定めし夫は天の命に等しとて、之に仕へき。ヨハンは己れ身を處するに嚴格なりしが故に、人各々の面の異なるが如く、各嗜好性情を異にする事を思はず、人も己と均しくせんことを望み、若し違ふことあらば、痛く怒りちらし、老に及びては益々かたくなとなり、不平忿怒も彌々募りしといふ。然れども亦彼はこの夫より利益を受けしことも少なからで、幼年の教育十分ならざるに代へて、嫁せし後は、夫の導の許に字を書き、洋琴を彈じ、歌を唱ひ、又伊太利語を操ることを習ひしが如きは其主なるものなりき。

三、家庭

結婚後の第一年は家事經濟、金錢出入、調理の法等凡て家政に關することを、姑の懇切なる導によりて學び

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぬ。第二年に至りては既に新らしき生命フランクフルトの中に入り來りぬ。即ちヨハン、カスパル、ゲーテの長子ヨハンウオルフガング、ゲーテ生る、時惟れ一千七百四十九年八月廿八日なりき。

此の時、彼女は芳齢方に十九才にして、世界は幾億人中に一を加へ、獨乙國も亦一人を増したるに過ぎざれど、フランクフルトの壁若し耳を持ちしならば叫びてよびしならん、かゝる新らしき聲は未だ曾て聞かざる所なりと。親類、知友は皆歡喜して之を祝しぬ、されど神ならぬ身の誰かは知りけん、後日の詩聖ゲーテは今生れぬと。幸福なる母は果してこの新生の赤子を抱きて、沈思何をか想像せしや。

彼女の小ゲーテを生みし後は、嬰兒を褓育することを最もたのしきとなして歳月を送りしといふ。彼女が女友某に送れる書中に曰く「君は以后常に妾を母と呼び玉へ、是れ妾が凡ての幸福を包括する唯一の名稱なり」と。

小ゲーテ日毎に彌々成長す、而して父の嚴格に過ぎたる性質は此愛らしき嬰兒に接するに於ても亦少しの差異もなかりき。然れども母は常に嬰兒は最も幸福と歡樂とを求むるものなれば、之を敎導するにも能く之を利用せざるべからず、嚴格に過ぐるの弊は、嬰兒に恐怖、嫌忌の心を増さしむ、是れ甚だよろしからず、寧ろ約束をなし、褒美を施さゞるべからずとなし、其敎育の主義は絶えず眞の愛てふ事にてありたりき。是に於て思ひ合はすることあり。或る時の事なるが、ナポレオン第一世カムパレといふ貴婦人と四方八方の物語をなしける折に、ナポレオン彼女に、昔より敎育の法多しといへども、余を以て之を見るに、一として價値あるものなし、これ諸々の敎育法に皆一大欠點あればなりされば其一大欠點とは果して何ぞや、と問へり。婦人沈思しばらくして答へて曰く「慈母なり」と。ナポ

レオン是をきゝ其卓見に感じて語て曰く「然り〳〵敎育の大本は實に慈母にして、此の一語の外他に敎育の金言なかるべし」と。

嬰兒漸く片言をいひ得る齡に至りてより、慈しみ深き母は、夜毎に寢に就くの前には、必ず先づ昔話を之れに語りきかせつ。此物語の中には、母自らの豐富なる想像より作りいでたる者も多かりきとぞ。母の心には之を聽く幼兒の想像をして、其思考を千々につゞりて、樂しみつゝ、又善に導く家庭敎育の一部とはなしたるなり。此の母の敎導は彼の兒に如何に感ぜられしか、又後日の好果を得る幾何なりしか、母の用意は空しからで物語の漸々にしみこみては創思の萌芽ともなりたり。

當時祖母も亦同じ家に住みしが、病によりて自在に身動きすらも出來ざれば、大椅子によりかゝりて、足にて其愛孫の遊び相手となり、日々の大半を消したりき。小ゲーテ此の祖母を訪ふ時あれば、祖母は常に彼の最も好める遊びをなし、四五の木偶を與へて芝居の眞似をなさしめたりき。此事は實に四歳の彼に氣に入りて、終生忘れがたき紀念とはなりぬ。されど曾て父は之を見て大に其幼童を害せんことを恐れ、是れを捨てしめんと勉め、一日母は父の命によりて此の遊具を臺所に近き押入の中に隱しゝこともありしが、小ゲーテ何しか之を見出して、祖母の居室に持ち行き、余念なく玩びたり。父も終には母の勸めに從ひ、此をさまたげずなりぬ。此の祖母の死後に至り、家は改築せられけるが、此の新らしき家は宏壯なる四階造りにて、其第四階の小室こそは是れ小ゲーテの居室にして、此の家の奧院ともいふべき處なり。彼が傑作「ゲッツ」、「ウェルテル」、「グラヴイゴー」の如き、又は「ファウスト」の發端の如き、皆此の室にて筆紙に上りしものなり。幼年のウオルフガングが深邃なる心情は、早くより既に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

宗教上の問題と觀念とに向ひたりき。是れも亦其敬虔なる母の感化の然らしむる所にして、母は幼き者の心に造物主を愛するの情を養ひ、又慈愛の神を知らしめむと勸めたりしなり、かゝる素養のあるからに、リサボン(千七百五十五年)の大震災の慘憺たる有様の報導に接して、人々恐怖を惹き起し、全市爲めに擾動せし時も、又雷鳴轟き渡り、稀なる大雹の降りしきて、市街の人民家屋を傷害せる悲慘の出來事ありし時も、之を見聞せる小ゲーテは大に迷ひ、且つ疑ひ、萬有の主にして愛と恩とをもて君臨し給ふ聖き父は何とて此の如き禍を下して、人々を苦め玉ふやとて、其解釋をぞ求めける、此の時にも亦此の疑惑を解きしは信念強固なる慈母にてありき。彼が其愛兒に及ぼせる感化は實に思ふべきなり。

故にゲーテは此の時代を以て、其生涯中の最大幸福時なりと稱せり。新築は見事に出來上り、父ゲーテの氣嫌は特に美しく、更に其家を修飾せむとて、日々に欣々然たり、又エリサベットは多くの小兒を撫育するの母となり、之をもて特の外幸多きとなし、或は親戚朋友の交際に忙はしく、樂しき月日をぞ送りける。」

然れども花には嵐、月にはむら雲、此の幸多き日は永續せむともせず、心苦しき事は踵を次ぎて起りしぞ是非なかりける。既に千七百五十五年には流行病にかゝり、生れて一才となれる一人の妹は、敢なくも夭死し、母の嘆きはいと深かりき。

(未完)

文藝

田園雜興(七)

不二行者

故　鄕

去年の冬故園に歸りける時、青山白雲の天然の面影今

さらながらまことに安靜に平和に、野人牧童の談話ゆまことに素朴に篤實なるを感じき。故園は此天然と此親しき人々のありてぞ、長へに樂しく懐かしくゆかしくも美しき情の緒を繋ぐなりける。

わが心の聲は覺えず口にのぼりて吟じたり。

君よ居ませと白雲は
　衣手かざし留むなり。
君すみてよと岩清水
　さゝやく聲の靜なる。
塵のけがれを隔てたる
　蘿のかつらの門のべを、
まもり顔なる蜘蛛の
　絲より細き妻木の烟、
たつや眞柴の伏庵に
　音なふものはなく小禽、
浮世の外の消息を
　語らふなべに遠山の
眉ひき笑ひうつろはぬ
　姿ぞ見ゆるとこしへに。
夢ならなくに故郷は
　雲に情あり水に心あり。
ゆかしきものは故郷よ
　そむきがたきは故郷よ
その故郷をしばしだに
　離りし身はも歸り來て
罪もほまれもあらし吹く
　松のむらだち葉をしげみ
うからはらから集ひより
　羈旅の疲もいへどころ
主歸りぬとよろこびの

聲こそうごけ言の葉の
花こそ開らけ酒うたげ
「しろ」も來よかし「たま」も來よ
汝等もはしき友どちよ、
　團欒の席に鷄も來よ。

紐より太き尾をふるひ
跳びつ狂ひつ誇りかに
まめなる犬はまつはりぬ。
身をうづみ火に冬ごもり
夢にふけりしかいねこも
　やから顔にぞついたちぬ。

めとり拉れだち鷄は
わかき冠をふりあげて
　呼ぶやかちどき聲高く。
晝の手業にひまをなみ

額のしわもよるふかく
やま田の翁おとづれて
おくる嫗のそばきりや
その末ながく君はしも
　まさきくあれと祝ふなる。

希望は高くおほそらの
　思想をひろくおほうみに
のせても身をばふる里の
郷の情の絲の緒に
人の心は繋がれて
　わが世の琴にしらべあり。

浮世をなんのしら雲に
　心まかせて山ふかく
たゞそのまゝにゆく水の
ながれの奥の溪遠く

住めばすまるゝ故郷を、
またこそ出づれ都には。
君よ居ませとその雲は
衣手かざし留むなり。
君すみてよとその水は
さゝやく聲のなつかしき。

冬は去れり、春は去れり、今は夏來りぬ。人の多く故鄕の白雲青山に親むの時なり。わが鄕思をもて他の鄕思をはかる。故里はにくきものにてはあらざらむ。

談叢

無花果と怠惰者

松ヶ枝女史

佛蘭西の征服を受くる幾年か前のこと、安逸なる而かも眠むけ催すブレダの小邑に實直な一人のムール人が住んで居た、父の名を受け續いてセデ、ラクダアと名乘つて居ますが邑の人は何時しか彼に「なまけ者」といふ綽名を授けた

御存じであらうがアルジユ、レアのムール人殊にこのブレダの住民といつたら全世界並びない氣樂者である、だがこれも無理は無いので、その市中に密柑や「レモン」の甘味充ち〳〵て、得ならぬ香氣鼻を打つて、四季人を誘ふて安穩にするを思へば……然し怠惰と無頓着の點に於てセデ、ラクダアは凡て他のブレダ人に一頭角を拔んで居る

是の好紳士は自分の惡癖を殆んど一個の職業とまで進ませた、他の人は或は縫箔或は「コウヒー」の賣捌き或は七味の賣却など夫れ〴〵職業を有つて居るがセデ、ラクダア特許の業務は只だ「なまけもの」で過すことであつた

彼が父の死後彼に讓られたものは市街の城壁の下にある小さな花園であつた、繞り立つ白堊の柵は半ば朽ちて門は開けた儘閉ぢられない數株の「バナ、」と無花果の木が繁生して、草の中には二ッ三ッの泉が心地よく湧いて居る

彼が出來る丈け五躰を伸ばして赤い蟻を一ぱひに鬚につけ身動きもせず靜かに横臥して居るのは即ち此處であつた飢ゆれば即ち手を伸ばして自分の近くに落ちて來る無花果や「バナ、」の果を拾ふて食べるがもし五躰を動かして枝からもぎ取らねばならぬ場合なら寧ろ饑飢に死ふとも動くは厭といふ風だ、それ故彼の花園には無花果は實のつた處で直ぐ腐り木は徒らに鳥の棲み家となつて居る

此の無上の怠慢はラクダアに非常の人望を來らせて衆人の彼を見ること殆んど聖徒の如くであつた婦人等は運動の歸りがけラクダアの花園の側を通る時は必ず驢馬を靜かに歩ませて優しき言葉をかけるし男子は又好んで敬禮を表した毎日學校の退ける頃縦縞の絹の上衣と赤い帽子とを着けた澤山の子供が群がり來てラクダアの名を高く叫びながら此の立派極まる「なまけ先生」を妨げやうと様々に苦心して朽ちかゝつた壁を叩いたり蜜柑の皮を投げつけたりするも徒勞！徒勞！先天的のなまけ者いつかな身動きもしない折ふし草の下から聲を出して「用心、用心今直きに起きるから」と言ふこともあるが決して起き上つた例はない

或時此の學校歸りの子供の一人が例の如く「なまけもの」に惡戯をしやうと企て、途中まで行くと如何なる風の吹き廻はしか俄かに彼の心中に祈願が起つた然り自分も亦斯かる「なまけ者」になりたいといふ大望が起つた、翌朝直ちにその赴を父に告げた「エ、、貴樣がなまけ者に……そんなことのあろふ筈がない、何、なまけ者？戯談もよい加減にするがいゝ」と樸直な父が答

へた父は正直な粉磨きで蜂のやうに忙しい而かも毎朝必ず一番鷄と同時に起る程の人であつた

「阿父さん、僕あセデ、ラクダアのやうな懶惰者になりたいのだよ」

「何？貴樣が成りたい、そりや不可ん、阿父さんのやうに粉磨きになるかそうでなければ叔父さんのアライのやうにカデの裁判所の書記になるかしなけりやならぬ、決して〳〵懶惰者などにすることあ出來ぬぞ、早く學校に行つて來い、聞かぬなら貴樣の後ろにあるその奇麗な新らしい櫻の木板も破つて仕舞ふぞ早く行かぬか小僧！」と叱り散らした

櫻の木板といふ聲を聞ては無理に剛情も張られずまあ改心したやうな顏付きであつたが、なか〳〵以てそうではない學校に行く代りに勸工場に行つて提灯や財布や劍や樣々のものを眺めつゝ上向きに寢轉んで色々な香氣が、鼻をつき來るのを吸ひながら、終日其處で過ごしたこれからと云ふものは學校にあるべき時間は何時も此處で過ごした

數日の後彼の父は如何にしてかこの事を嗅ぎ付けた、然かし如何ほど叱ろうが怒らうが撲うが叩かうが店にある丈の櫻の木板ですかそうが一向利き目が無い、彼は只だ「僕あ懶惰者になりたい、……懶惰者になり度い」と言ひ張つて何時でも何處かの隅に寢て居た、

彼の父は遂に持て餘して叔父とも相談の上一つの計畧を案じ出した

「聞け、貴樣が懶惰者になりたいと望むからは、貴樣をラクダアの處に携れて行つて試驗してもらをうと思ふのだ、もし貴樣に大懶惰者になる丈の氣量が充分あるならばラクダアに弟子入りを賴んで遣らう」

「實に面白い」と子供は雀躍して喜んだ

翌日早速頭を剃り立て「ウオルベナ」の香油など匂はせて懶惰者を尋ねに小花園に出かけた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

門は常に開けて居る二人は案內もなく這入つた然かし刈つたこともない雜草は生ひ茂つて此の小花園の主人公を見出すにはなか〳〵の困難である漸つと探がし出せば彼は園の片隅の無花果の木の下に寢て居つて澤山の小鳥がその周圍に翔けて居る

父親は近いて「セデ、ラクダァ君お障りもムいませんか」と至て恭しく會釋した「此れが私の息子ですが此度是非懶惰者になり度いといふ志願なのですから、何とぞ一つ試驗して見て下さいますまいか、もし合格しましたらどうぞお弟子入りを願ひます、入要なものは何でも仕拂ひますから」

セデ、ラクダァは答はせずに、自分の近くに座を取れとの意を素振りで示めした

父は坐つたが子は寢轉んだ、此が先づ最初の好顯表で三人共何の語もなく、暫時互に見詰めて居た

恰も晝の眞最中で天氣は飽くまで晴朗で暖かくわつた園內の萬物悉く眠つて居るやうで微かに聞ゆるものは日光に蕾を開く金雀花、草の間に涓々たる泉及び扇子の開閉のやうな音を發して木の葉の間を飛び廻る小鳥……あゝ皆眠氣を催させぬものは無い熟し過ぎた無花果は絕えず枝から落ちて來るラクダァは疲れた樣子をしながらも手を伸べてその實を攫んでは自分の口に運んで居る

然し粉磨の息子はそれすらする樣も見えません選り拔きの無花果が彼の側に落ちて來ましても頭を向けることすらしない、花園の主人はこの奇拔の懶惰を橫眼で見たが一言もいはない

一時間二時間と此の樣で過ぎた、憐むべき粉磨翁も今や漸く此處に坐し居る時間の餘り長くなつたに倦きたろぶが、彼もさるもの一言もいさず身動きもせずに坐つて居つた、彼の眼は閉ち瞼は交叉せられて見えた、定めし此の「バナ、」や密柑の香氣に充て居る小花園の

催眠風は何時しか父の心にも睡魔を吹き寄らしたのであらう
俄かに一個の大きな無花果が木から落ちて童子の頬に大きな實がくつ付た大きな果で、その紅色、その香氣、まあ何と譬方もない、それを口に入るゝには只だ指を一寸動かす外何等の勞も要らないのに猶それすら面倒と思ふが果實を空しく頬上に匂はせながら動かずに寢て居つた
然し、終には食慾を制することが出來なくなつたので父の方に眼を配つて大きな聲で叫び出した「阿父さん、阿父さん、それを僕の口に入れてお呉れ」
此の語を聞くやセデ、ラクダァは手に持つた無花果を遙かに投げ遣つて怒つて父親に言つた
「して、此れがあなたが私の處に弟子にしたいと言ふ子なのですか！却て反對に私の敎師です、此の子が私に日課を敎へて呉れべきのです」
と言ひつゝ跪いて、頭を低く地面に下げ、新來の兒童に敬禮した
「お祝ひ申します誠になまけものゝ大將軍！」と繰返へして。（完）
（右は南非アルジュレアの昔噺）

猫の仇討

園部紫嬌

下之卷は　甚六へげ猫と化て鼠を捕へ
殿樣奥方の笑はぬに困ず

猫化の甚六權八婆の家に食客となつてからは、隨分尻尾を出さぬやうに心掛け、妻の三毛猫と鼻突き合せて、日に脊のみ曝し、其他は仇討の時節來るをのみ待て居りましたが、或晩婆樣が御法談を聽聞に出掛た留守中、甚六が例の牡猫と顔見合せ、『コレお三毛、私は此通り甚六殿のお身體へ魂魄を入てしまつたから、私の以前

の躰には魂魄がなくなり、千里ケ藪の側に倒れて居るから、最早今頃は赤か黒に喰れたらうて、ヂヤニ依て若し仇討ちをしまふたら、左樣何時迄も甚六樣のお身體に魂魄は置れもせず、ト云て歸る身體はなしマア仇を討て仕舞ふ時は、私が丁度死ぬ時ぢや、夫にの翌日仇に出逢ふも知れぬ身ぢやに依て、今日は幸い婆樣も居ぬ樣子、何と別れの鼠を捕るまいか』と淚片手都手に手水を使いながら語ると、思ひは同じ牡猫も亦、『ほんに私も左樣思ふて居りましたが。是も何かの因緣かと私は遠から諦てぢや、そんなら今日を別の鼠』其鳴聲の忠義故』『翌日さへ知れぬ貴猫のお命』『サア鼠を捕ふかのウ』

と是から二匹で鼠を六匹捕て、泣く〳〵別れの鼠を喰合ひ、其夜は事なく濟みましたが、濟ぬは牡猫の心配で、明の朝から甚六が鼠を喰た爲かチウ毒で、足腰たゝず醫者に掛り、遂には婆も金錢に困つて、明日の烟も六ケ敷、牡猫の碗もひからびて勝になりました。

偖てお噺は變りますが、伊賀の國平崎の殿樣吉世承知之助と申されます方の奥樣ツンツウの前は、苦虫蟄太夫のお姫樣だけに、生れてから笑つたと云ふ事のない方で、殿樣も是計りは吉世とも承知とも仰せがなく、誠に困て居られましたが或日臣下一同をお呼出になり『三太夫』御家老が『ハツハツハア』『實はの、今日其方共に惣出仕を命じたのわナ』『ハツハア』『奥がの、其方共も存じて居る如り生れてから未だ且て笑んで』『ハツハア御意で』『ヂヤに依てのウ』『ハツハア』『ア、是ア』『ハツハア』『左樣ハツハアと申すな、誠に蒼蠅ていかんよ』『ハツハア』『まだ申すか』『ハツハア』『所での其方共を呼出したは、自分の上下は論ぜんから誰にもあれ奥を一ツ笑はした者には十石宛加增申し付るて』『ハツハ、、ハツ』『コリヤ〳〵大分慾張て返事を致すな』『御意でハツハア』兎角す間に末座から一人の武士進み出

で『怖れながら申上ます、私奥樣の前へ座りまして、斯樣鼻の穴へ指を入れ、口を開いてモ、ソガアと申上ましたら如何で』『アイヤ、私考へますには、口を尖し眼をクワッと開き、兩手をブラリと下て右左に搖り動し御覽に供へ、奥樣夫は何の眞似ぢやと仰せられましたら、蛸の芋堀りと御答申し上』『アイヤ私考へますには、奥樣の脇の下を甚だ以て怖入り奉る儀ながら、チヨコ〳〵と擽ぐりましては』『アイヤ殿樣』『オウ三太夫、何ぞ好い智慧があるかな』『ハッハア御意で』『イヤ又ハッハア御意かな』『ハッハア仰せの如くの御意で、私熟々考へまするに、奥方のお笑を招くと申せば事小なるに似れど』『ハッハア御意かな』『是は殿樣の御言葉恐れ入り奉ります、所で事小なるに似たれど』『フ、ソ成程』『所謂智慧競の儀にムりますれば、戰上に謀計を廻らすも同全』『フン〳〵』『然れば私不肖ながら悉くの智謀を振い何かと思案の末』『フン〳〵一計を案じたか』『ハッハア御意で』『シテ〳〵其謀と申すは』お蒲團を辷られて二枚餘り膝を進め『甚麽ぢや〳〵』『ハッハア、夫れ謀は密なるを宜しとすとは孫呉の秘書にも説れたり、』と三太夫聲を私め『依て小音に申上まするが』『フン〳〵』『先づ白紙を細く裂きまして』『コリヤ〳〵白紙とは白い紙ぢやな』『殿樣の御總明驚き入り奉ります』『シテ夫から』『其裂きました紙を斯樣額に唾るて張りまして』『フン〳〵大分面白さふぢやの』『ハッハア御意で、其張りました紙を斯樣に口を尖らせ』『ウン〳〵』『フウフッと吹き飛しまする顏色の珍妙不可思儀なる所を奥方樣の御覽に供しましては如何で』『いかにも珍妙不可思儀ぢや』『ハッ、御意の趣き』『イヤ唯さへ不思儀な其方の顏色を變じたらば是は珍妙不可思儀ぢやらうな』『ハッハッハア重々怖入たる御意で』と大評定を開きましたが、偖て是ぞと云ふ名案も浮ばぬので、誰彼の差別なく、一藝一能一案を持つ者は、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明日五ッ時惣出仕にて奥方のお笑を招ぎ、功ある者には特別の思召を以て、十石御加増の所二十石と事定り、其日は悉皆退出致した。

お咄前へ戻て、八瀬の里權八婆の家では、甚六が鼠のヽヽチユウ毒に病みて立居も儘ならず、藥の代にも事を缺く、洗ふが如き貧乏の、捧が次第に太くなり、婆の皺腕には所詮觸り廻されぬ仕儀となつたので、『ア、女の兒でもあつたらば、粉はわりながら饂飩の粉では賣るにも賣れず』と毎日歎息して居りましたが、此饂飩の粉が古くなると寢粉になると云ふ所から思ひ付て、牡猫の三毛を賣る氣になり、或日牡猫に云い聽すと、啫と返事もにやく計り、然し是も我夫牡猫甚六の病氣を直す爲ちやと覺悟を定めまして『にやんとでもなされまし』と云たので、婆は涙ながらに喜んで、京の或旅宿へ賣た其金錢で木天蓼を澤山買込み、甚六も養生に鰻の頭を澤山喰べたので、忽ち病氣全快致し、再び仇人討の時節をのみ待て居りましたと。

丁度牡猫の身を賣てから二十日目の日に、甚六が茫然柱に凭れて考へ込で居りますと、畑田圃の可忌なく、一目散に飛で參つた牡の三毛が、『甚六樣仇人が私の旅人宿へ泊りました』『エッ仇人勘左衞門が其方の主人の旅人宿へか』『ハツハイ』『シテ／＼甚麼云ふ仔細でな』『ハイ何が委細は解りませねど、暫く京都に泊て居たさうで、明日は未明に出發して、伊賀へ歸ると申しますから、少しも早く御仕度を』『オウ／＼是より直樣出立致さう』『必ず共に御油斷なく』『其方は是より引返し、猶も樣子を窺い呉れよ』『心得ました』『急げ／＼』

牡猫が引返すと、此由を婆に告て、甚六も續いて出立しやうとすると、『唯さへ七人の敵ありとか云ふものウ、イサ先づ是をと、婆が寸志、仇に勝栗よろ昆布、お頭つきは田鰯の燒肴、一盃二盃三献の納めの土器討

ち割て、イザト計り京へ向ふて討立ちた。

彼烏勘左衛門は甚六を討て捨て、暫く京に潜み居りしが、最早好い頃と角のめいたが注進に、明日は未明に出立し伊賀の國へ歸らんものと、其準備最中の所、次の間より飛込みきたりし惣領の甚六『ヤア珍らしや勘左衛門、一旦汝に討れたる甚六が身體に痩猫の魂魄通い今月今宵我身の敵を我討んとて來りたりはなまき得たる饂飩屋の花がつをサア〳〵勝負』と呼びたれば、勘左衛門は夢かと計り打驚き、椽側より家根へ逃げ出し、我からひろむ晝鼠、猫に逐はれし如くにて軒を傳つて隣家の屋根へ逃るれば、自体痩猫の甚六何ぞ怖れん、ヒラリ〳〵と屋根を飛び越へ、遂に勘左衛門が首をあげて、火鉢の中へ足を突込み、煮立の汁を嘗めたる如く、夫と是とは變れども踊りつ跳つ喜び勇み、其足で京都を跡に、伊賀の國へ歸り、直樣承知之助樣の御前へ出仕致しました。

偖て承知之助の館では、今日ぞ奥方の御笑を招んものと、惣出仕にて各々智慧袋の底を拂い、手を盡し品を變れど、仲々莞爾とも仕たまはず、一同二十石御加増のお墨附を取捲て思案に暮れ果た所へ、先頃死だと思つた甚六が出仕したと云ふので『直樣是へ』とお呼出になる、甚六是迄の仔細を述て仇討の次第を語り、誠は猫の魂魄通ひ居る由まで包ず言上したので、殿樣は大きに感じ且つ賞され、甚六の身體に永代痩猫の魂魄住ひ候も苦しからず、今後御寶藏の番人を勤め忠勤怠りわるべからずとの御意にて早速小判十枚恩賞として下された處甚六『怖れながら申上ます、私儀は失禮ながら小判は頂戴仕れません』『ハアテナ如何なる仔細あつてぢや』『猫に小判とやら申しまするで、願くば堅魚節十本とお交替を』と申しましたので、一同ドッと哄笑し、奥方も始めて『ホヽ』と二ッ笑はれたので、甚六忽ち二十石頂戴仕りまして、其後御寶藏の大鼠を退

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

治し、又々十石御加増となり、八瀬の婆を呼び寄せ、旅人宿の牡猫を買い戻し、家富み榮へて、數年の後ち國中にある猫の頭になつたとさ、先は目出度〳〵

（完）

小説

山むぐら

太田玉茗

（四）

こゝは日本橋の小間物問屋で、田島屋とかいふ商店であるが、小僧も五人や七人はあり、番頭も二人や三人はあつて、可なりに博く取引してゐる。

健三はこゝへ年季に來てより、朝は五時から敲き起され、夜は十一十二時の頃まで、いかなる日でも寢ることは出來ず。晝は方々へ使に出されて、遲いと言つては何をしてゐた、どこで道草を食つてゐたと、意地惡番頭の赤面に叱られ、のろまめ馬鹿めと小僧共は、健三の弱味に付入つて罵り、田舍野郎と散々に愚にする。けれども健三は弱年であつて、一番新參の小僧でもあり、一番年齢も行かないので、又從つて小柄であるから、力づくでは元より敵はぬ、口の先でも又及ばぬ。及ばぬながらも敵はぬながらも、くやしまぎれに手を出したり、口を出したりするものなら、殆ど半殺しに敲かれた上、小さい癖に生意氣めが、大きなものにからかうと何だ、馬鹿めと番頭は睨めつける。何でも過失があるといふと、小僧は擧つて健三にかづける。健三はいつも辯解する。多勢に無勢で辯解が立たぬ。遂に無實の罪に陷ゐる。屢々お目玉を頂戴する。

健三は悲しさ口惜しさに、殆ど立つ瀬も浮ぶ瀬も無いので、寢ては涙に打咽むで、啜り泣してゐることもある。何を泣きやわかる喧ましいと、其度朋輩に劍突を

食つて、居ても立つてもゐたまられず、寧そ逃げ出してしまはうかと、時々思ふことがあるが、辛抱せよとは此處の事だ、家も何にもないのだから、どこへも本統に行處がない。あゝお母樣もゐないんだし、又お父樣も居らないんだ。爺やだつても貧乏だから、歸つて來ちやあ可けないと言つたし、みいちやんところも余所の家で、已には到底も行けないんだし、本統に已は困つたなあ、何だつてお母樣は死むだんだらう、お母樣さへ死なゝければ、みいちやんと一緒に居られたもの。みいちやんは今頃どうしてるだらう、みいちやんは今頃どうしてるだらうと、端なく妹の容貌を畫いて、其まゝうと〳〵とまどろみはじめる。

そこは一面の廣野原で、處はどことも不分明であるが、小川はゆる〳〵と流れてゐる、雲雀や黄鳥はあちらこちらで、いかにも樂しげに歌つてゐる、茅花や菫やつく〳〵しは、見わたす限り花咲いてゐる。妹は花の中に立つて、兄樣〳〵つく〳〵しを採らうよ、茅花や菫を摘まうぢやないかね、ほうら此處にも、ほうら此處にも、こんなに澤山あるのだから、疾くおいでよ疾くよう、兄樣〳〵と聲揚げて呼ぶ。かと思ふと舞臺が變つて、今度は母の墓の前で、嘗て妹と遊むだやうに、二人でおもしろく嬉事をしてゐる。今度は河原で石を拾つて、これが富士山、これが筑波、これが何だ、かれが何だ、奇麗な石だ、おもしろい石だ、持つてゝお母樣に見せやうぢやないか、あの箱庭に飾らうぢやないか、何のかんのと遊むでゐる。すると今度は菜畑であつて、花が盛に咲き滿てゐる、蝶々は花に戯れてゐる。自分は妹を追ひまはして、みいちやん〳〵其處へ行つた、兄樣〳〵此處にもゐる、疾くお捕よ疾く〳〵と、二人は夢中で遊むでゐる。すると今度は家の裏で、何かのまちがひから妹を泣かせた。母は自分を叱りつけて、小さなものを何故泣かせる、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何故妹を可愛がらぬ、言つても〱性根がない、かうしてやると手をつねつた。痛くはないが悲しいので、自分もわつと泣き出すと、妹は母に取縋つて、母樣堪忍しておあげよ、兄樣は惡くはないのだからよう、母樣と泣きながら留めて、かばうてくれるありがたさに、子供ながらも後悔して、みいちやん堪忍しておくれと、さうあやまつて仲よくしやうと、又手を曳いて遊に行く。

折しも健三は呼起されて、樂しい夢を破られると、依然田島屋の商店であつて、又憂いつらい悲しい苦しい、年季の身の上となつてしまつた。

健三は妹に別れる時、兄樣はいまにえらくなつて、家も作るしお前も呼ぶ、待つておいでと言つたもの丶、現在冷やかな境遇の爲めに、暖かな昔しにかへらむとして、みいちやんは何うしてゐるだらうか、遇ひたい見たいの念のみがまさる、而うして戀しさ懷かしさが、潮の海門に推寄せるが如く、一瀉千里の勢ひを以て進む。

行きたいな〱、あ丶行きたいなとは思ふけれど、思ふ通に出來ないのは、無斷で出たなら叱られるだらう、再びこ丶へは入れられまい、入れられなければ行處がない。それかと言つて願つたところが、到底主人は許すまいとの、一つは簡單な理由であつて、且又一つの理由といふのは、妹の貰はれて行つた處で、十里已上の遠方であるから、滊車でなければ行けないので、滊車に乘るには錢がいるが、其又錢の出どころはなし、手には一文も持たぬのである。

そこで健三はどうしやうと、可愛や小さな胸を痛めて、遂には霧中にさまよつたが、結局第一の理由があつても、錢が欲しい錢が欲しい、錢さへあれば滊車に乘つて、妹に逢へると思つたから、欲しいは僅少の錢のみである。けれども得られぬ、決して得られぬ。

家政

婦女小兒衛生瑣談

黒田生

◎婦女子と運動

我國の婦女子を通觀するに下等社會のものは勞働充分なりと雖も、中等以上に至りては一般運動その當を得ず、身躰強壯を增進し筋肉を强固ならしむるは手業に若くなし深窓に生長せる貴女子に至りては運動不足なるが爲め分娩を見るに槪して難產あるものなれば必す適宜の運動を心かくべし第一朝夕箒又は掃塵を把りて運動に換ゆるは運動の一法にして我國にては少女の鞠を弄するは殆ど習慣となれりこの技や四肢の運動をなし筋肉を强壯ならしめ皮膚をして潤美となし病害を驅除し骨盤の發達は分娩に適切とならしむこれ生理學上の證するところなり然れども過度の運動は却て害あり又食後直ちに運動するは消化を妨げ却て害ありと雖も習慣となりしものは大害なしと云ふ

◎婦女子と早起

諺に早起は三文の德あるのみならず衛生上一大要件なり早朝新鮮なる空氣に觸れ旭日の東天に昇るを見るときは神氣已に爽快なり彼の植物を見るに葉緑は吾人の目を悅ばしむるも之を暗窖中におく時はその色素は作用をなし能はずして黃色となり往々枯死す又窟中に成長する小兒を見るに必ず矮小にしてその色靑く地下に住するものは生色なくして死人の如し「フロレンス、ナイチンゲール」氏曰く病人には新鮮なる空氣と殆ど平行に緊要なるは日光なり凡そ病者その疾の速に全治せんと欲せば必ず直接に來る日光を被らざるべからず、虎列剌流行の時に陰街に臨める家若くは此等の家に猖獗を極むるは、日光よき居宅に住するものに比すれば

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

毎に甚だ多しと我が帝國醫科大學に於て新築せる眼科小兒科産科婦人科傳染病室等の搆造を見るに盡く日光直射し陰影の如きは少しもなし歐人某曰く健全なる人は六時間乃至八時間を就褥の時間と爲せ八時間以上を要するものは身躰の非常に衰弱せる者か將た病者に限ると、この語信するに足らん又早起は家事の整頓順序に必要なり睡眠を度外に長くなす慣習をなさしむるか將た家眷は已に起きて各事を取るに監督者褥中にありて可なるべけんや早起の習慣は唯一家の利害に關するのみならず、社會の利害に關す、されば各人共早起の習慣をつけ置くべし

◎小兒の啼泣

小兒一二歳の頃日々啼泣するは誰も同じ事にて珍らしき事にあらずこれ必ず生育に益あり聲音を發するに由て胸腹を順利し、四肢の運動を活潑にし精神を快豁になし從て血液循環を順ならしむるは生理學上の事實にしてその證あり然るに世の慈母は愛に溺れて動もすれば此の啼泣を制せんとして種々の過愛をなすは人情なれども角を矯めて牛を殺すの弊あり、母親たるものの宜しく反省すべし

◎小兒の怜悧

小兒にして大人の如く怜悧なるありこれ一言には云ふ能はずと雖も、通常腦髓の不健全なるより生ずるものなり、故に讀書等を嚴禁し勉めて新鮮の空氣中に遊戯せしむるを可とす、然るに世の父母たるものは往々此事を以て慶事となし故意に小兒の心を刺撃し更に薪火を以て腦神經を痛ましむるものありこの小兒は多くは腦力衰弱し、「デメンケア」なる恐るべき病氣となり天壽を全する能はざるもの多し多くは幼時の利發は成人後に却て無智愚鈍となるもの多し、小兒を完全に發育せしめんには、成るべく早熟の弊に陥らざるやうにすべし

◎小兒の血液

幼兒の血液頭腦に上り逼進し易し必ず頭は暖むるべからず發病の期は豫知する能はずと雖も多くは生齒の期にあり生齒の期は生れて七八月の頃に小兒は自己の指を以て屢々口中に入れ或は乳房を強く嚙む是れ齒の生せんとして爲に齦に痛痒を起すなりこの時に母は己れの指を以て軟かに齦を摩ずべし是れ注意すべし

◎小兒の頭痛

頭痛はその子兒元氣旺盛となる時に血液の遺毒を軀外へ排泄すべき便路を得たるもの故決して之れを治せんとすべからず、もし非常に劇しく腐敗の憂あるときは醫者に診察を乞ふべし、若しこれを厭ふならば三プロセントの硼酸軟膏を清淨なる布に貼し一日二回づゝ貼じ換へよ決して猥りに藥劑を與ふべからずこれ注意すべきことなり

◎小兒と歩行

小兒は十一二ヶ月より常に立歩を習はしめ又は匍匐せしめて獨自ら歩する樣になせこの習慣を附す時は三歳の頃二里の遠程を行くも疲勞せず生れて二十ヶ月乃至三十ヶ月にして言語行歩自由ならざるものあり、多くは後來大病を發し鬼籍に上るもの往々見る所なり、勉めて治療を怠る怨れ屢々痙攣を發し救治する能はざるに至る

◎小兒の衾褥

衾褥を作るには必らず棉花を容れたるものに臥せしめよ、なるべく臥の習慣をさせ棉花は纖維夥多集合するものにしてその兩面の間に在て之を離隔しその中の空氣に抵抗して空中にある如し必竟棉の功用は纖維間に空氣の一層を作る恰も禽獸の羽毛を有すると同一理なり、故に晴天の時に褥を日光に曝して小兒を臥せしめよ

◎小兒と入浴

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小兒は入浴せしめよ入浴せしめるときはその夜小兒の熟睡するは確實也抑も入浴は何の必要なるかと云ふに身體を不潔になせば養液機關を惱ましめ病害を釀すの源となす清潔に保つは入浴に若くものなし故に入浴は衛生上一大緊務と云ふべし

◎羅馬の浴室

浴の根源は古昔猶太希臘羅馬等の人々は之を以て身を清潔になし、精神を爽かになすの良法となせり、紀元六百四十年「アレキサンドリヤ」府の陷落の時浴室の數大約四千有餘戶あり、皆莫大の費を以て羅馬の浴室に摸倣せしものなりと云ふ「トルコ」「ペルシヤ」「エヂプト」亞細亞未開國に於て潔身の術に至りては文明を以て誇視する英米に勝れりと云ふべし

◎我國の入浴

我國にては王公貴人より下衆庶に至るまで入浴せり而して會席其他にて美味嘉肴を供給して客の需に應せざるなしと雖も、却て缺くべからざる浴室の設備なきは大に憂慮せしが近來に至りて此の必要を感ずるに至れり、さて入浴の時刻は寢に就かんとするとき可なり、決して食物を喫し未だ消化せざる時には入浴すべからず、況んや飲酒の時に於てをや、之を意に介せずして入浴し心臟破裂を來たせしものあり、入浴時間は躰の構造、强弱に關すと雖、多くは十五分時より四十分時を以て限りとす、東都の婦人入浴は概して長時間且つ雜談に時を費すこれ過ぎたるは及ばざるが如し却て衛生法によりて害毒を招くものなり

◎小兒と强壯

嬰兒は嚴寒たりとも衾爐にて温むることなかれ、母の肩にて温むべし何となれば火はその勢盛なるのみなれば是がために逆上し又火を離隔すれば却て寒冷を增すを以てなり次に頭は露出し胸廓を開き薄衣を着さしむるを良とす母綿衣の時は兒は袷を用ひ母袷なれば兒は

單衣を用ふべし、冷浴は馴性刺衝の強壯劑なり故に健康なるものには之をなすも可なり併し漸々に施すべしそれ火を見よ火は風あればよく燃燒して酸化力を增進せるものなり然れども微々たるものに烈風來れば能く燃へざるのみならず火は消滅す治療育養の方も亦然り次に入浴は嬰兒には必要なりと前項に於て論ぜしが過度なる時は却て害ある故注意すべし小兒は七日に二回位を可とす、みもだへの狀態を爲す兒には一日に二三回も半浴即ち腰湯を用ふるを上策となす、次に兒に襯する木綿は狹くろしきは宜敷からず能々揉み柔軟性となし糊氣をとりたるを用ひよ、父母の舊衣を用ゆるは可なり、兒を臥さしむるに側に偏なるべからず肢體枉屈の因となることあり、或は光燈火も偏に受くべからず之を守らずして往々「すがめ」となるものありその證には今植物を鉢植となして一方は家に一方は日に面し久しくおくときは植物は一方に傾くを見るべし、小兒漸大きくなるも羊羹、餅の類凡て砂糖の多くある蒸菓子干菓子等を與ふるべからず能く疳疾の因となる、注意せざるべからず

◎小兒と齒磨粉

齒は誰も知る如く中部は齒腔にして象牙質を以て被わる象牙質を被ふものは齒根は白堊質にして齒冠は琺瑯質なりその琺瑯質は六角プリスマ狀の纖維より成る故に注意して保持すべし、世俗の人は動もすれば粗惡の齒磨粉を用ゆるは非常に害あり注意せよ通常の齒磨粉は白堊を以て製したるものなるを以て必ず小兒に用ふべからず屢壯年にして衰弱する所以は通常自然の脫落にあらずその之を用ゆるの注意なきによる幼時齒牙の生長するに方り妄にその成長を妨ぐる故なり齒牙に應ぜざる食を用ふるべからず齒を淸潔に保つには、常に柔軟なる刷毛を以て齒間に食物の滓滓其他汚物等を淸除すべし

夏日の飲料水

勞働社會にては多量の水を服用するも大害なしこれ汗となり發すればなりもし婦人の如き家にあるものにして猥りに多量の水又は氷水等を服用すれば輕くは腸胃加答兒重きは「コレラ」「チフス」となることあり注意せざる可らず又汲置の水は必ず用ゆべからす汲たてとてあまりよろしからず一度煮沸して用よもしその間に合はざる場合あれば「コップ」一杯に稀鹽酸二三滴を加へて用ひよ

氷水は寒冷にすぎ歯痛を起し又は胃腸を害することあるを以てよろしからず少量を清水に加へて用ひよ

「ラムネ」は近來非常にあしきものあり記者兩三日前ある所にて玉ラムネ一本を飲む刺激する甚しよく見るに硫酸を以て配劑せるものなりきこれは大に害あり併し普通これを撿定し難きを以てなるべく手製のものを用ふべし

適宜の「コップ」に適宜の砂糖(單舍利別なれば一層可なり)を加へこれに清水を加へ別に重炭酸曹達を「コップ」に溶解せしめ又別に「コップ」に枸櫞酸若くは酒石酸を溶解せしめ重炭酸曹達を酒石酸なり枸櫞酸なりを三と一との比に滴加せしめよ最もこの二劑は何れをさきになすも可なりこれは夏中客來の時は妻君の御手際にもならんか

乳房の注意

先づ産後に「オリモノ」ありこれに指を觸れその指にて乳房にさわる時は乳房に炎症を起し非常に痛みを受くることあり又乳房甚だ小なるか乳量の少量なる爲め乳房を「ヒチリ」「ヒッパリ」てその量を増さんとするものあり記者この實驗を非常に多く見たりきこれは非常なる危險なることなるを以て注意ありたし

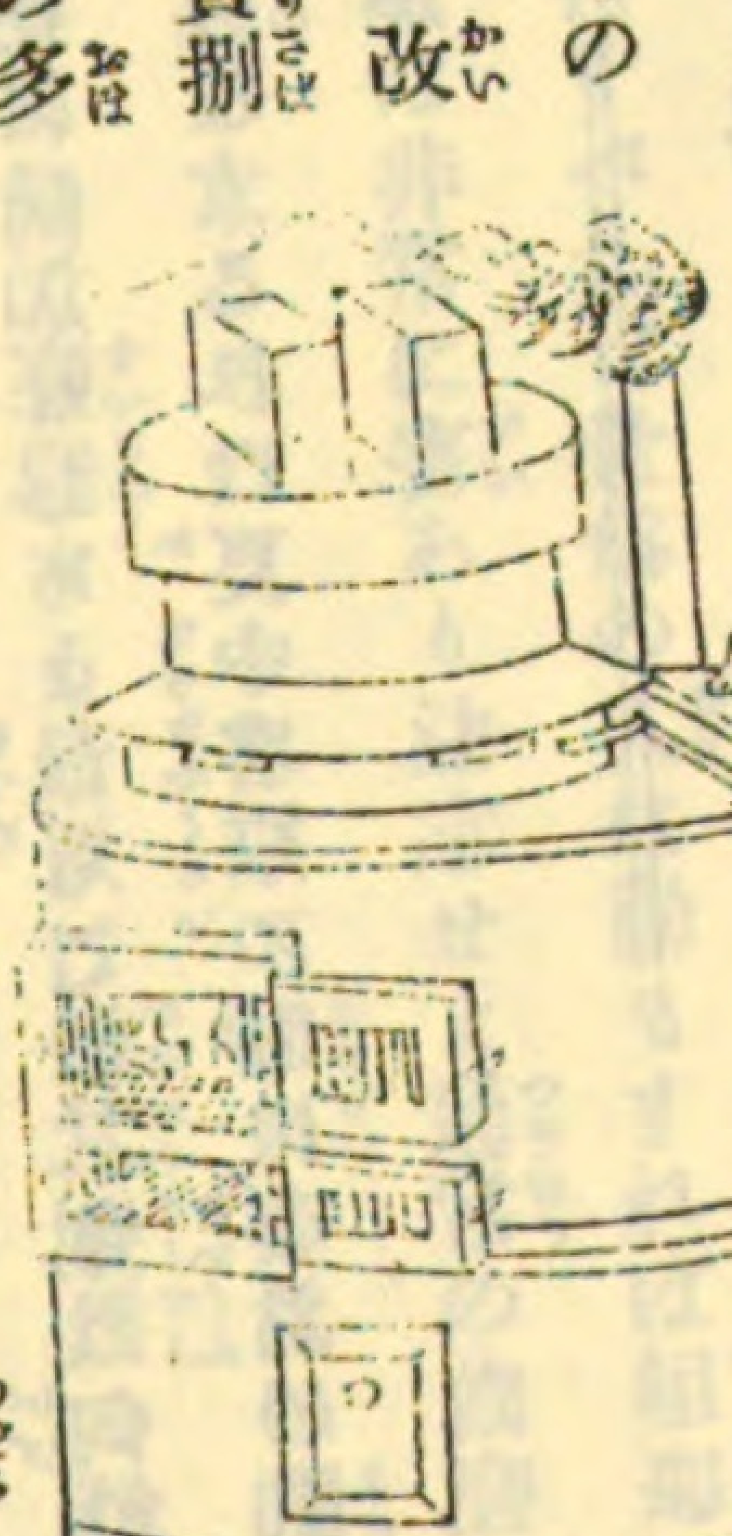
小兒に乳を與ふるその量は、多くの實驗によれば小兒生後一ヶ月間は乳を授くること一日九回にして乳汁の量は凡そ百六十匁を適用となす即ち一回は十八匁位とす第二ヶ月には一日六回乃至七回にして百九十匁即ち一回の分量は二十六七匁位とす第三ヶ月には一日の全量二百二十匁又四ヶ月より九ヶ月に至るの間は一日の乳量二百五十匁にして一回の量百匁に至るを標準となすべし

第一齒の發生する時期迄は乳を授くべしその乳を授くるに時期を定めよ生後二週日間は毎二時にその後は毎三時に授け夜中は五時間乃至六時間はやすむべし夜中猥りに與ふるときは小兒を窒息せしむることあれはなりこのことにつき本誌九十六號に精く論じたり

乳を不規則に與ふるときは健康に害わるは吾人三度の食事を不規則になすときに害わると同理なり人類は習慣性動物なれば正しき規則を以て順序的に養ふを第一の事務となす

臺所道具（改良竈、湯沸、水漉）

◎庖厨に於て最も大切なる用を務むるは竈なり、然るに舊來の土製竈は其の構造粗雜にして不便利不經濟を極むれば、到底日々の忙しき使用に耐えず、依て近年に至りては、此が改良を計るもの次第に出來て、改良竈と稱して賣捌くもの十餘種の多きに至れり、左れども、大同小異、一々記すも煩はしければ、玆には唯だ中に就いて最便益なるものを揭げて、厨事に苦む人の一覽に供せん、圖に示したるは、五德竈と名付るものにて、形は小判狀、側は總銅製にして上下二ヶ所の窓口あり、而して又た脊部に煙筒の



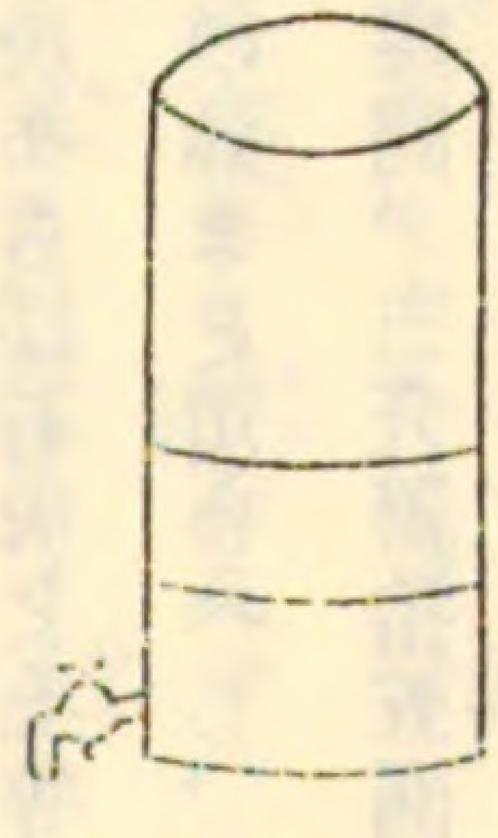
設あれば在來のものと異なり、空氣は絶えず竈の内部を流通し居れば、如何に未熟初心のものといへど決して火を消盡すの憂なし、釜口の左側にある取柄の内部は空虚にして、總て錫を以て塗り詰め、銅壺の用をなす、釜を卸して釜口に鐵輪を箝むれば、鍋が掛かり、且つ又火地輪の代用をもなし得る便利なる構造ありて、之を使用するには先づ上部の口蓋を開き、中しきりの鐵網の上に、薪炭何れにても適宜に入れ、其上に焚附を少し乘せ置き、火を點じて上の口蓋を閉ぢ、下の口蓋を開きて團扇を以て風を煽ぎ入れ、火力の強まりしを見れば、其儘に打棄て置くべし、火は自然に燃え立ちて消ゆること無し、飯の炊け終るを見ば、上下の口蓋を締め置くべし、さすれば火は自然に消ゆ、それより又味噌汁にても煮物にても拵えんと思はゞ、鐵輪を釜口に篏めて鍋を掛け、下の口蓋を開く時は餘燼再び燃立て一個の薪炭二度の用を足すなり、銅壺の湯は飯が出來ると同時に沸騰して飯前食後の喫茶料に供せらる、銅壺の内側は錫引製なれば綠鏽等の生く憂無く、又底に掃出口あれば何時にても清潔に掃除し置かるゝが故、衛生上無害の飲料となすべし、此の五德竈は燃料を減じ手間を節し、土製竈に要する半分の時間と半分の燃料を以て、炊飯の苦業も容易に仕遂げ得らるゝなり、之に供する燃料は薪ならば松薪を一等とし、炭ならば石炭を上等とす。石炭に次ぎては松炭か土釜の如きを用ゆべし、惣銅製一ッ焚の並物にて二升器拾四圓、三升器拾五圓五十錢、四升器拾七圓、六升器廿六圓、特別重目製の二ッ焚にて二十七圓(一升器)より四十五圓(六升器)までとす、販賣所は日本橋區通り油町十九番地石川銅物店なり。

◎尚ほこれより一層安直なるものを求めんとせば、神田和泉橋通り松永町十八番地名和商店專賣の子持竈か淺草茅町一丁目淺草橋際阿部彦四郎鐵物店の富貴竈を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

宜しとす、子持竈といふは圓柱形にて下部に大なる窓口を存し、其內部に火壺を備へて自由に引出さるゝ裝置なり、火壺の內には炭、薪、コークス、何れにても使用され得、されば飯の炊け終りて蒸らし置く間は、火壺を外に引出して煮物鍋を掛け、火地輪に代用さるゝの便あり、價は鐵製にて三圓十錢(二升器)より七圓三十錢(七升器)まで、半銅製にて六圓七十錢より十七圓八十錢までの數種あり、次に富貴竈といふは炭焚のみを以て使用さる物にて、鐵板製と惣鑄鐵製の二種あり、形狀は朝顏の花の如く上部に於て斜に開き、而して其の上部は胴部より自由に取外されて、これも亦た火地輪の代用をなすの構造なり、此の富貴竈は釜は申すまでも無く、鍋、鐵瓶土瓶の如きものに至るまで、形の大小に拘はらず欲するまゝに掛け得られ且つ亦た火消壺の用をもなす、其他に養蠶家が溫暖飼育器にも適用し得らるゝといふ、價は鐵板製にて一圓五錢(一升三合器)より三圓五十錢(七升器)まで、惣鑄鐵製にて一圓八十錢より五圓八十錢まで數種、

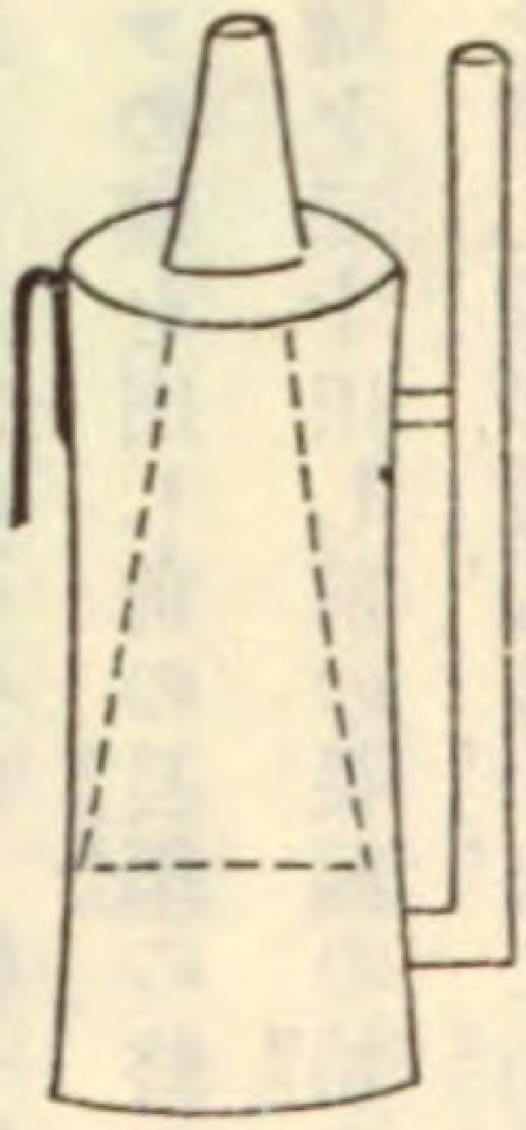
◎夏日に於て最も恐るべきは汚濁なる水にして、往々病魔の淵源たることを知らば是非共水漉器を備へて生水を精漉せざるべからず、近來東京市中に行はるゝ水漉器は、圖に示したるが如き圓筒狀のものなり、こは



日本橋區今川橋側有信舍專賣特許の器具にて、これには鐵トタン製と銅製との二種あり、圓筒の大きさは直經五寸高サ一尺二寸位なるを普通とす、その內部には二個の圓板あり、圓板には數多の細孔ありて水を流通せしむ、而して底部の龍頭よりは、漉されたる水絕えず淨水となりて滴り出るの構造なり、此の器を用ゐて新に水を漉さんとせば、二枚の圓板を取外して筒の底部に海綿を詰め、其上に圓板を乘せ、次に木炭を筒の厚サ四寸許に入れ又其上に圓板を敷き、次に白

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

砂を上部より三寸位下までに詰むれば、それにて水漉器の裝置は出來たるなり、價は鐵トタン引にて小形一圓三十錢大形二圓五十錢、銅製にて小形三圓、大形五圓五十錢なるが、之に尚ほ木炭四合と白砂二升を要す、木炭は一升二十五錢白砂は一升二十錢なり、白砂も海綿も屢々清水を以て洗ふを善とす、何時までも同じ物を其儘にて使用する時は、遂には浄水も浄水ならで、却て危險を見るに至ることあれば、よく〳〵注意すべきことなり。



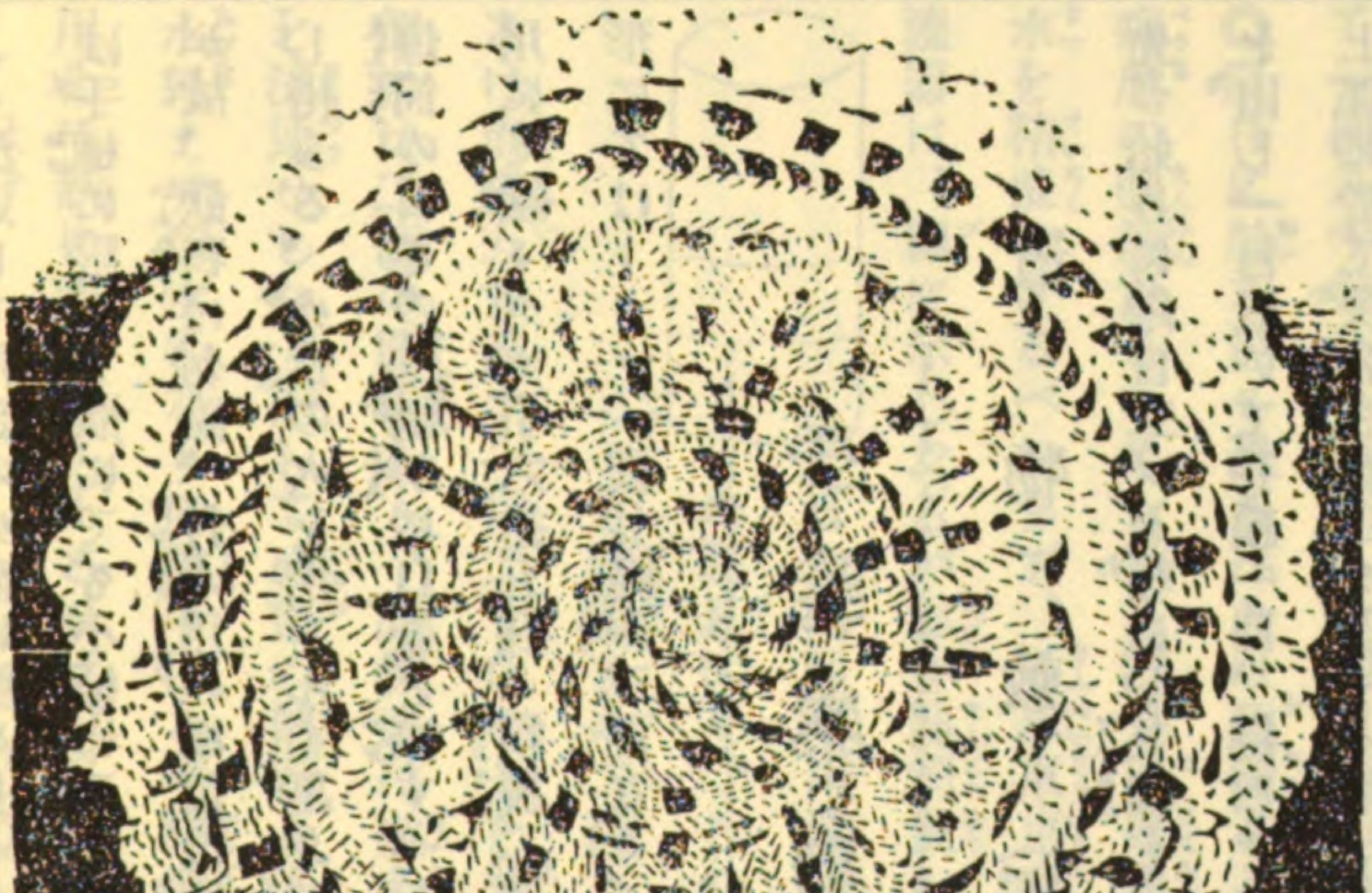
◎輕便手桶湯沸　此も前記有信舍の專賣品にして、其形は挿圖の如し、筒内の虛線は錐柱形の火壺を示し、右側の小管は煙筒を示すものなり、火壺の中には炭火を入れ置き、而して之を水を盛りたる手桶に投入すべし、さするも湯沸器は己が重みだけ沈むのみにて、上部一寸許は水面上に浮び出で、水は筒側の孔より流通して内部の火壺に暖めらるゝ構造なり、左ればは手桶に限らず瓶にても小桶にても適意に使用さるゝが故、飲料は勿論、行水用の湯位は極く〳〵手輕に沸し得らる、火壺の火を消さんと思ふ時は、火壺の口と煙筒の口との二個所に口蓋を被すべし、價は通常手桶用にて鐵トタン引六拾五錢、銅製二圓、四斗樽用の大形にてはトタン一圓廿錢銅三圓なり。

手藝案内

置物敷（編物）

先づ始めに鎖目三ッを輪にし長編を一回なし、鎖目三を出し一目置いて長編一回、鎖四ッを出し前の長編の上部に於て矢張長編二ッをする事一廻、其上に鎖五を出し前の長編二ッの上にて又二ッの長編をなすこと一

回、次に前の五ッの鎖に五ッの長編を入れ鎖二ッを出して編むこと又一回、それより別に鎖二ッを出し前の五ッの長編の中央に、帽子編を以て止むる、次に又二ッの鎖を出し前の長編の終にて止むる、それより別に鎖を三十出し前の長編の始めにて止むる、又二ッの鎖を出し前の長編の中央に帽子編を以て止むる、次に又二ッの鎖を出し長編の終りにて止むること一回、其次は前の鎖目の上に長編六ッをなし、其處より二ッの鎖目を出し又其次に長編一ッすべし、其次には鎖四ッを出し又長編を七ッなす、其の隣に一目の中に長編五ッを入れ、又其の隣より七ッの長編、鎖目を五ッ出し又長編二ッ、鎖六ッ、次に五ッの長編、それより向側の鎖に移る、前の鎖目の上に長編六ッ、鎖三ッ、隣に長編一ッ、又鎖三ッ、又長編七ッ、其隣に鎖目一ッ長編五ッ、かくの如くして一廻す、又別に鎖を九ッ出して前の五ッの長編の中央にて帽子編をなす、それより鎖目九ッ作り前の三ッの鎖目の中央にて止むる、次に



又九ッの鎖目を作り前の五ッの長編の上にて帽子編を

以て止むる、かくすること又一回其次は前の鎖目の上を總て長編になし、又其上を長編一ッ鎖二ッ、次に二目置きに長編を一ッなすこと一回、前の鎖目二ッの内に四ッの長編(但し一目に一増)、鎖五ッを編みて、鎖目四ッを越えて長編四ッ、かくすること又一回、其次は鎖目を六ッ作り前の五ッの鎖編の中に帽子編を以て止むる、又七ッの鎖目を出し前の五ッの鎖編の上にて帽子編を以て止むる、こと又一回、其上に鎖目五ッ、又別に四ッの鎖目を作り、四ッ越えて五目にて止むる、前に作れる七ッの鎖編の中央に長編四ッ入れ、鎖目六を出し前の帽子編の上にて矢張帽子編を以て止むる、次に鎖六ッを出し四ッ目越えて五ッ目に止め、前の鎖の中央に一ッ目に長編二ッ、鎖六ッを作りて、前の目に又長編二ッを入れ、鎖六ッを出して長編の終にて止む、又鎖七ッを出して編むこと一回すれば、これにて出來上るものなり、

寄書百珍

家庭的避暑法

筑后　菊池玉代

いと丶片なりなるおのれしも人がましう差出なんはをこのわさながらおのが家の年毎の避暑の有樣ありのま丶に書しるしてん「今日あすのほどよりおほやけも學校もなつの休みと聞くからに先づ待たる丶は某のあがたに宮仕へし爲ふ兄君あつまの空に物學ひ給ふ兄君いつしかと思ふ程なくいづれも車つらねて歸り給ひそれと聞きて近きほとりに嫁きたる姉上も來たる夕うれしげに子等のかほ打ほ丶えみつ丶見かわし給ふ母君を中に打水したる庭に向ひて端居し互に問ひつ問はれつ物語りしたる夜さし入る月の色さえ殊に清らかに自つからすゞ風立ぬる心地ぞするげに親はらからの中むつま

じうたのしぶは外にたとしへんものこそなけれかゝる中には如何なる暑さも之侵さぬものにや

平和屋のあるじ

吾夏時の家庭は早起にあり田草取りにあり時針午を指す頃は裏の籔蔭に我は疊二枚ばかしの蓙を運び夫が上に慈愛なる母のチガ〳〵せる子供と生れて二三ヶ月なる嬰兒とを看護給ひ而して輕く梳けづれる吾に柔順なる妻がお三の補助を得て調理なせる新鮮淡白なる菜蔬に添ふて飯は吾等の前に運ばれ吾等は打くつろぎて四方八方の話とあどけなき無邪氣なる子供等の遊べる樣とによりて快よく之を食し終りて其日の新聞と雜誌を讀み又彼等にも讀みて聞かせ後少時の睡眠を試みて再び午前の仕事をば繰返すなりかくて五時にもなれるならば茲に再び裏の籔蔭に於て慈愛なる母無邪氣なる子供柔順なる妻の前に平和の祈禱の捧げらるゝにあり是吾家庭の最良なる避暑法なり

德島　阿佐宇治郎

一　避暑中に完結する過度に腦髓を勞せさる一種の簡易なる事業を起し豫め所定の時間内に於てなす可し何となれば人は一定の事業なければ優柔不斷に流れ易し優柔不斷は快樂を得るの道にあらず

二　規律正しく起臥し午睡を許さず

三　毎日適宜の運動をなす可し

曙氣晴空涼風を衣袂に孕ませ田間を逍遙するも可なり

陽光遠山を傾斜し涼風一陳屋の内外を掠むるの頃浴湯を終り緩々たる川流の河畔に釣を垂るゝも可なり

明月夜の梢に掛り涼氣乾坤に滿つるの夕心合ひたる友人と手を携へ橋畔に涼を納るゝも可なり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

要は適宜に運動するにあり

四　家屋の開通邸内の清潔一家の團欒固より家庭の避暑法に欠く可からさる要素なり

足利　愛錬生

毎日自己の務むべき事をなし終りて後妻女と小兒等と田舎の風景を眺めて物語るこれ實に夏時に於ける好個の避暑法にして又冬時寒を忘るゝの最良法

神奈川　千年坊

予が年々實行致し居候避暑法は左の如し

一朝は午前六時に起き冷水に顔を洗ひ食事をなし職業に従事し室内の掃除は妻に任し正十二時に歸宅し冷水に身躰を清め午食を爲し時計午後三時を報すれば又職業に從事し（正午より三時迄は暑氣厳烈なればなり）午後六時半を以て終とす其より入浴を爲し一家團欒し夕食を爲し表へ一の椽臺を出し一家相和し共に語り共に笑ひ以て一日の暑を忘過申居候

三池　默思生

粛白生は田舎者にて避暑とて須磨、明石、松島、厳島、天橋立、温泉などに行きたること之れなく只毎年々々家庭内にて暑を迎へ暑を送り申候其の家庭内の避暑は左の如くに候

一毎朝早く起き新鮮なる空氣を吸ひ垣根に吹き出たる朝顔をなかめ申候

朝顔やあれし籬も新らしさ

一晝間は毎日送り來る新聞雜誌其他色々の書を繙き倦めば余が唯一の躰育法なる漁に出掛け行々子の喧しき蘆間にてセゴ、クロメ、鯽、蝦など獲、家庭に入り申候

長き日も短く思ふ漁かな

一夕方になれば行水し晝間獲たる鮮魚を或は煮或は汁にして涼風吹き渡る椽先にて一家團欒之を喫し申候其味に至つては一種言ふべからざる程に候

むつましきものはよいもの揃ひをし

防州小郡　松谷松琴

第一　衣食住を清潔にする事は云ふ迄もなく午前十時頃より風呂へ湯をわけし置數度汗を流すべし

第二　朝は下婢の起出て車井戸に水を吸む音を聞くとすぐ自分も起きて麗水にて顏を洗ひ又身體を濡手拭にて能く〳〵拭て裏の籬根及び畑あたりを少し散歩し清潔な空氣をすひ朝顏爪南爪茄子などの露を結んでる花を見るも何となく心すが〳〵してよしそして十分程して書室内外の掃除し然して朝飯を食すべし

第三　正午飯を終り少し休息して庭や飛び石などに水を散き座敷の上り口などの板の間を清く拭き表の手水鉢へ水をなみ〳〵と入れ「コマノカシラ」ども入れ水を吹き出さするも涼しくてよし軒には青すだれをさげ風鈴も「涼しさは夕顏棚の下涼み」など記してさげるもいと興多し

第四　尤も午後四時頃迄が暑さはげしき時に付き此間は職業など休む方よからむそして第三の如く室内庭園を掃除して郵便となげ込みし新聞雜誌など見るもよからむ時節柄避暑的旅行記など家庭的避暑眼にて讀むも面白き物なり晝寢などは堅くなすべからず

第五　午後六時半頃より又第三の如く座敷庭園など掃除し庭木へも「ポンプ」にて水をやるべし然して湯を使ひ浴衣を着替へ日の暮ぬ内庭前に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

て夕飯を食すべし晝暑かりし夜は殊に涼しき物なればあまり涼みすごさぬ樣十時頃には寢に着くべし

右之如くする時は三割方「百度の物が七十度」は涼しく成るべし。すべて夏は自分の心を涼しく持つべし。暑い／＼と云ふて體をぐにや／＼なし。午後は二時間も三時も晝寢をして。あゝどをも暑くて／＼。氣分が悪くて。いけぬ。どうも夏はいや／＼。などゝ。自分から暑さをまねく樣な事ゆめ／＼あるべからず

山城吉祥院村　安田梅子

妾の家庭の避暑法を左におしらせ申します、妾の夫は出商賣で、イエあきないとは違ひますよ、そして潔僻家ですから、モウ歸宅時分といふ前に編物の手を止めてチ、ソコラ奇麗に掃除して何一つない樣にチヤンと片付けて置いて、ソレから臺所へ往て下女を相手に襷掛になつて豆々しく晩餐のこしらへをするのです、何はなくとも淡白としたるもの二三品は夫の膳へ上して何時でも喰べられる樣にしておきます、やがて夫が歸りますと行水の湯を夕貌の下に採らせて夫の背中の汗など流し、そして湯から上つて端居して新聞など見てゐるうちに手ばしこく妾も行水をすませ、さて膳二ツを椽に運んで樂しく共に箸を持ちますの、御飯の櫃はツイ兩人の膳の側にありますが、態々手づかみで妾が給支をして漬物もつけれは茶もかけるといふ風に萬事に氣をつけて夫の手は只箸持ちて喰べるだけにして、そして其隙には夫の不在中に、手紙の來た事やら、來訪者のありし事やら、暑中見舞に白砂糖を貰ふた事やら、權助が若竹籔を掃除して蛇に出られて驚愕した可笑さのまだ忘れられぬ事やら、お鍋に前刻打水をさせたら庭前の松に鳴いてゐる蟬に水をかけやうとて辷りこけた事やら、隣の子供が晝學校から歸ると直ぐ泳に

往て今のさきまで川にはいつて居た事やら何やかや、暑くるしい事は避けて、勉めて無邪氣な話をすると、夫は例の武張た肩を一段そびやかして嚴格な顏に微笑を含んで、『ヨーク饒舌ノー』と象牙の箸で鮎の肉をつゝいてゐる、ヨーク饒舌ノー、これは口癖で、これの出る時はいつも尤愉快で尤得意なのですよ、妾も少し笑ひながら、『如何でございます今日の壙燒は、桂川で晝過にとれましたのを、頼んでおいた漁師の家からもてきてくれましたの、酢の利が足らんでしたか』と少しひげをすると、押へつける樣な左も重々しい聲で、『甘い』。やがて食事がすむと蚊やりをして、灯をともして、本なり何んなり夫が見るといふ風になりて居ります、これはホンの一小部分ですが、今晩は大分更けましたから、また明晩に讓る事として、少し申上たい事があります、世間には色々の人があつて、無暗に妻を大事がる夫がありますナ、一寸いふと夫は妻を煩はさぬものなどの考よりかして、自分で爪もむけばかまども燃きつける、客人がゐるとてソレ敷物ソレ煙草盆ソレ茶盆ソレ團扇と妻に普通ならさせる所を皆自分でする人がある、コンナ人の細君はドレ程氣兼かドレ程本意でなからふか妾なら得見て居ない、何の爲の妻です、夫は終日外に在りて疲れ切つて歸るのですもの内を守る妻がその位の小廻りは當然です、妻たるものゝ本務です妾はアノ夫に女のすなる事をさせてボンヤリ見てゐる妻君の氣が知れませぬ、アゝモウこんな暑くるしい話は致しますまい折角涼しくなつたのがだいなしになりましたとはちと小說的なれどこれは妾が眞實に夫につくす勤、此外に避暑法を考ゆる遑はありません

社交一斑

流行の栞

流行子

夏坐蒲團

相變らず流行するは、革蒲團にして、目下中流以上の社會にては大抵之を用ゆ、形は圓、角共に流行の優劣なく、何れも今年は賣口よし、この價八圓五十錢以上十三圓以下、又木塲岡山製の錦座、錦花莚さ稱し兩面にて壘の中央に白拔摸樣を編出したるものも革蒲團に準んで流行、錦座の片面には、裏をコホリ天、譜絨、ビロードなぞにしたるも兩面に續く流行、價十枚五圓より十圓、麻蒲團は二三年前よりチラホラ使用され來りしが、今年に至りて益多く愛用さるゝを見受く、色合は白茶か薄鼠にて無地製の淡泊(あつさり)したるもの目下非常に賣口あり、西洋麻にて十枚三圓内外、日本麻にて十枚六圓五十錢位さす、この錦座(にしきざ)さ床蒲團の兩者は、目今割烹店や溫泉宿等の納涼、避暑を重さする坐敷に多く敷かれ居れり、支那製の太布蒲團も最上社會には愛翫するものもあれど、通常の坐敷には餘り見受けず、其他普通一般に珍重がらるゝはアンペラ製兩面のものなり、こは地質堅牢にして保耐え善ければ愛用者續々增加せんさす、次に下等社會に汎く重寶がらるゝは岐阜涼團なり、この流行は全く假の瘢なるが爲めなり、されど現今の狀態は都會よりも山家の方に多く流行せり。

博多單帶

暑中は一般一重の輕きもの愛用さるゝ傾きなり、色合は薄鼠、薄茶、御納戶など、可成無地の淡泊なものを夏向博多帶の第一等さして好む、價は八圓位より二圓五十錢位迄、次に瓦斯博多に至りては一層着用者多く、これも一重にて紺地に御納戶獻上の片側か、又は紺地に鼠の片側か、さなくば兩側共に紺無地のもの(價三圓位)を最上さす、縞物ならば極く細かきを撰むべし。

夏羽織の紐

男物にては籠打の長地坪第一位を占む、色は銀鼠、利久、なぞ、蒲色も目下流行の最上なり、(價一圓内外)、次には丸打にて短かきものを貢さす、色合は籠打に同樣、(價五十錢より八十錢)、婦人持には籠打の短坪が、最多く愛用さる、純白、薄鼠、紫紺なぞの色合、殊に好み手澤山なり(價三十錢より四十錢まで)。

雜録

女中奉公

林 恕哉 (投)

我邦從來の習慣(しうくわん)より云へば、女中奉公(ぢよちうぼうこう)なるものは、父

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

母たるものが其小女をして大家の禮義作法を見習はしめ、以て嫁期の準備をなさんと欲するの主旨に出で、小女自らも一度女中奉公をなして處世の道を學ばんと欲する所以にてありし、恰も小女の大家に奉公するは今日の學生が學校の經歷を作らんと欲するが如く、一生涯の履歷となりて、肩幅の廣挾にも關係せしなり、されば其給銀の如きは實に些少のものにてありし、漸、湯錢、髮結代を給せらるゝ如き姿にて、父母も小女自身も給銀以外に學習せんと欲する目的あれば、斯る僅少の給銀にて滿足せしものにてありし、

今日にては乃、然らず、女中奉公を望むものは皆其收入の多きを欲し、且其仕事の氣樂なるを擇むようになれり、この頃中等以上の家にては、女中の拂底に困却せるは事實なり、必竟するにこれ少しく容貌の小奇麗なるものは、料理店茶屋に行き、さなくて幾分の獨立の氣象あるものは、鍋の尻をいぢるなどは意氣地なきことなりと稱して、相當の職業に從事するが多き故ならん、而して又中等以上の家庭にても大に風紀亂れて、從來の如き清潔にして嚴格なる家庭に乏しく、偶々かゝる家庭に小間遣ひとして奉公するものも、或は若旦那の甘心を得んとの前途の野望を抱けるが多しと聞く、中等以上の家庭已に清潔嚴正なるは稀なり、女中奉公をなして禮義作法を見習はんと欲するも能はず、上下共に頽亂して今や又從來の如き經歷を作りて嫁入りの土産たる履歷を得る能はざるに至れり、

中等以上の家庭既に禮義作法を見習ふの資格なし、而して又一方には生活程度の高まるにつれて、生活の摸樣も以前の如くならず、されば其結果として幾分かにても收入の多きを望むに至るは免るべからざる傾向とや云はん、加ふるに其務めの氣樂なるを欲する點より、是非料理屋及び茶屋を擇むの多きに至る、これ實に必然の勢なり、且社會の風潮日一日と華美驕奢に赴きつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

丶ある結果として、料理店茶屋の繁昌は言ふまでも無し、か丶る場所に女中を需要するの度も亦以前の如きものにあらざるなり、

料理店茶屋女は概、身振を小奇麗にせねばならぬ客商賣のことなれば、隨つて衣服も華奢に流れ、容貌も修飾するが多し、其結果たる弊害は、遂に旦那取と化け、さながら地獄女の如く、密淫婦の如く墜落するに至る、彼等が結婚するは多く馴合より出づ、女中下婢のカケ落談は常に新聞紙三面の


(一)

飽種となりて、日々予等の鼓膜を撲ち來る所以のもの故なきにあらず、

されば現時にては、社會淫風の幇助者として悪まねばならぬものは、料理店茶屋女に多く之を見る、彼等は實に淫風の媒介者なり、彼等のうち高等地獄と稱せらる丶もの丶多きは實に其一例なり、必竟これ世の中の驕奢に傾けるより起る一種の弊害なりと雖、當人の不心得不身持は勿論、父母たるもの丶不注意より出づるもの多し、嘆かはしきの至りならずや、

予は前述の弊害を矯正するの策として、女子職業の必要を認むるものなり、婦人にして堅氣に世渡りせんと欲せば、相當の職業を擇みてこれに隨ふべきとなり、婦人たるもの眞面目に正當なる職業に從事する時は、實に左の利益あり、

(第一)婦人に獨立の氣象を與ふ、(第二)人の母たるの務めを缺がざるに至る、(第三)驕奢の風を矯正す

るに足る、（第四）淫風を防遏するの効あり、（第五）間接に國力を裨補す

其他細微の點に至りては、其利益枚擧に暇あらずと雖、兎に角蜜蜂が春秋營々として自己のために冬季の貯へをなす糖蜜は、社會を利するとの大なるが如く、婦人自身も利己のために營む職業によりて、社會上に少なからぬ利益を與ふるは前陳の如し、（婦人の職業に就きては家庭雜誌上に親切なる案内あれば爰に略す）

婦人矯風會事業（四）

ウイラード女史

正午の祈禱

祈禱の靈感は實に婦人禁酒軍の基底なりき、實に人民の家庭に於ける神の「ペンテコスト」（聖靈降臨）なりしなり、正午の祈禱は今や唯だ白レボンの婦人會のみならず大なる救世軍、キリスト教奬勵會萬國婦人及び青年婦人キリスト教聯合會キリスト教事業同盟會その他數多の會に依り致さるゝてふ事實は誠に改革事業の歷史に記載すべき勢力の顯著なる表示にあらざるなし

此の勢大なる祈禱の波の愈々傳波し行きて正午の日陽その光線に治療の力を含みて上る義の太陽の表像として輝く時、何所如何なる時を問はず人の心の開かれ回生清潔の能力としてその光線を受け入るゝの時天の使の大軍も共に來りてその祈禱に加はるに至らんことを信ずるものなり

チール、ダウ、デー（禁酒會紀念日）

毎年三月二十日はチール、ダウ氏の誕生日とて萬國禁酒會にては一の紀念日として守らるゝなりされば何れの禁酒會にても必ずこの日を覺えて守られんこそ願はしけれ

社會宗教政治何にまれ一大運動をなさんにはこれに相當せる主導者なかるべからず然らざれば其成功や期し

Digitized by Google　　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

難かるべしおもふに上帝は特種の男女を撰ひて責任を負はせまたこれに堪ふる勇氣熱心をも與へて人類社會國家安寧幸福を致さんため神の御國の一日も早くこの世に來らんことを務むるが如し

「生者に與ふる花は死者にたむくるものに勝れり」といへば吾人はこの生前の勇士をあがめていさゝかおのが微心を慰めん

ダウ氏は所謂禁酒事業大改革者主導者の一人なり而してウイラード孃は氏を稱して「禁制の父」と呼べり氏は大律法を著作せしがこは議會にて通過されし極最初のものなりき其結果は囚人の數を減し酒造家を減じ孤兒の數までも減じたりき氏は若年の頃より此事業を贊成して盡力せられしが遂に老年に至るも决心を變ぜざりき

或人曰く「義心の收穫はたがふことなし」とまことやダウ氏の如き其結果勝利を見しものといふべし氏が九十二歳の高年に達するまで嘗て曇りなき頭腦鋭き知覺を有ち得しは全く禁酒の功名譽ある石碑ともいふべきかな氏がなせし先例こそ吾人後者の摸範として眞價を奏すべし

(二)

妾は先年氏をポートランドの自宅に訪へり氏が住居は今より五百年前流行なりし「ニユウ、イングランド」風の質素なる書籍室に案内せられぬ四圍高くつみあげたる書類の内より立ちて迎へ出られし主人こそ一見博識高見の士と察し得られき身丈はやゝ日本人に等しく清潔なる服裝より豊かにひろき額のほど雪



の如き頭髮の後に垂れたるいふべからざる威嚴を呈せり其の談話のうちには厚き信仰と氏が特權を喜ばるゝ感謝の意にて充てり嗚呼此の如き精神なかく存して吾人の進路を照らし大勝利わかつきを見るまでともにあらんことを請願書の第一最初の勝利は氏の力にて得られたれば氏は終まで禁酒會員諸氏の心中ウイラード孃を除き上座を占めて他に一步を下らざるべし

日本青年諸氏御國の爲め同胞の爲めまた其身の爲めダーウ氏の如く勉勵ならんことを　（完）

交詢

◎第十八問（本鄕象峯君へ）氣鬱症にて小事と雖も心頭に介し就寢の塲合に酒の醉に乘して就眠するも之が爲に貴重なる金錢と時間を失ふ弊あり、酒なくして良方法あらばとの質問につき答辨左の如し

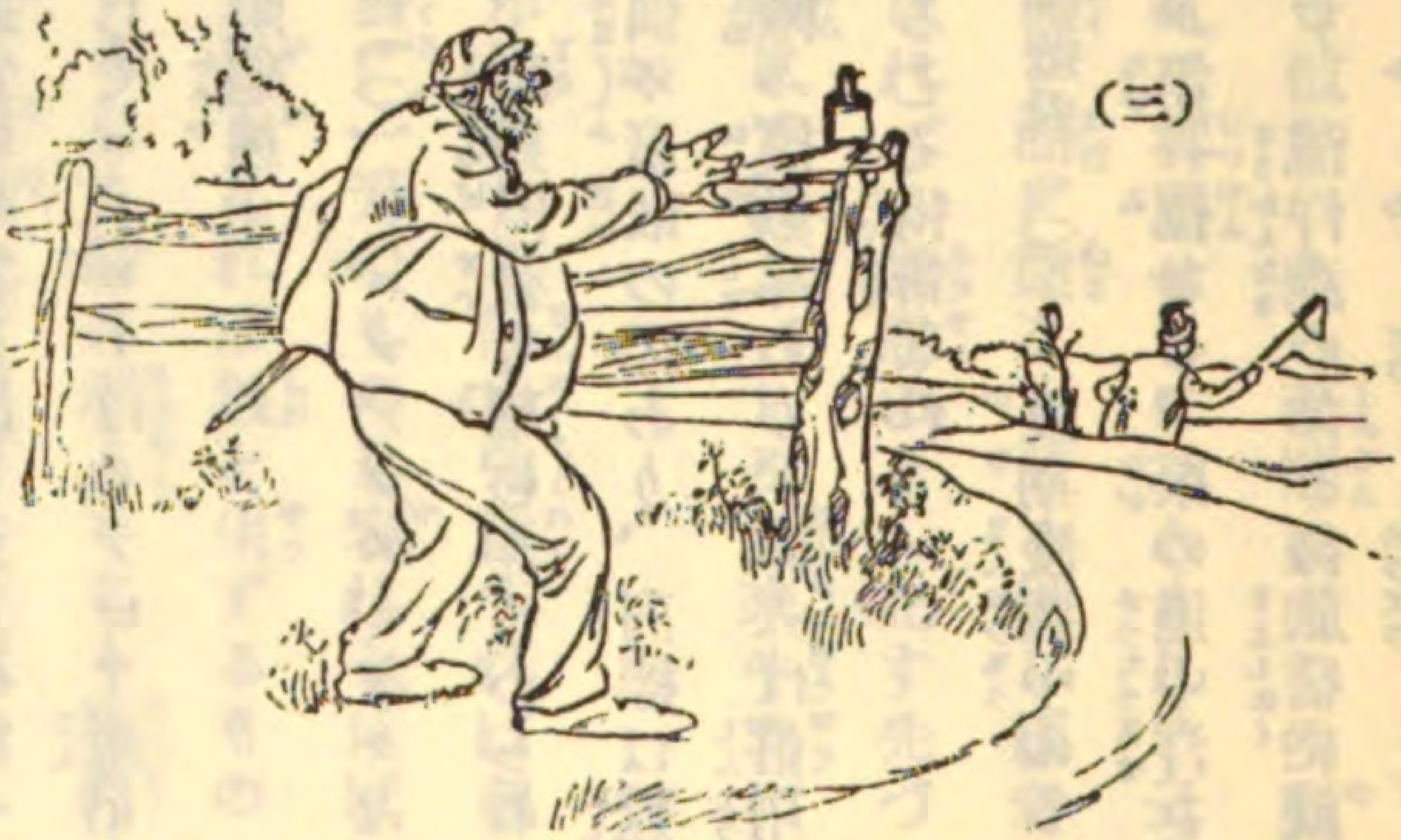
貴下に限らずかゝる事に苦悶せらるゝ人世間に多く聞き及び候人は十分（通常七時間乃至八時間）の睡眠をとらざれば常に腦神經を刺戟し、神經銳敏となり小事と雖も氣にかゝるやうに相成候此際の最も好方便は十分安眠を取ることこそ貴下の氣鬱症に唯一の藥劑にて候、酒は心身を痲痺せしめ候もの故使用然るべからず、斯の如き塲合に貴下の如き持病ある人が經驗せし治療法を聞くに就寢前一時間許、珠突の戯を爲し或は擊劍を試み、或は腕押を爲し、或は庭前を散步し、或は家人良友と快談を爲し、靜に寢床に就く時は、必らず安眠の效ありと聞けり、就寢前に生葡萄酒（甘味なき藥用品）一ぱいを傾くるも好結果有之哉に聞き及ひ申候

◎第十九問（上州前橋すひ女君へ）改良竈、湯沸、水こしにつきては本號家政欄に記載せり堅炭にて不便あり矢張『土竈』の如き柔き炭が經濟的なり、又松薪を使用する改良竈もあり、パストール水漉器に就きて

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は他日說明の期あるべし、頗る高價の品なり

◎第廿問(丹後北濱君(一)) 東京市内にて最も大きく且つ信用ある下駄商(問屋にあらず)は古よりの老舗は淺草區茅町香取屋、日本橋區にては萬町の萬屋なりと信ず



(三)

◎廿一問(神奈川縣向丘村鈴木君(一)) 便所其他不潔の場所へ使用の防臭藥は、昨年より本所大日本製藥會社にて發明販賣して好評を得たる「アルボース」防臭劑は、石炭酸よりも價廉なり、價一罐十錢

◎第廿二問(横濱辨天通淡水君(一)) 夏向牛肉の食法はビーフステーキこそ最も好適と存候これは道具も要せず素人にても容易に出來得るものにて多分御承知ならんが、其料理法は柔軟なる牛肉五六分の厚さに切り之をビーフステーキ鐵網(普通の餅網にてもよろし)に乘せ、肉の裏表に牛酪をぬり鹽も少々ふりかけ二十分乃至三十分强火にて燒くべし、膏火中に落ちて燃え立たば鹽をふりかくべし、兩面をかぶり終らば肉皿を煖めて牛酪をとかし其上に炙きたる牛肉を盛るべし、ビーフステーキの料理は冷えたる後が却つて旨味あり、這は編輯者の家にて能く實行する料理法なり

◎第二十三問(大磯眞壁君(一)) 諸新聞雜誌書類等を定價より廉に發送する取次所は澤山有之候京橋區尾張町東海堂、同區鎗屋町北隆館は重なるものにて候

◎第二十四問(本所田舍娘君(一)) コーヒーの入方はコーヒー器(ブリキにて製し上下二重となり、上の部へコーヒーを入れ、上より熱湯を注ぐ時は、コーヒー液は

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

下部に落つ)に我が好む分量(濃と稀とは人々の嗜好によ る)一匕叉は一匕半入れ、上より湯をそゝぐ、之をコーヒー茶碗にうつし、適宜の牛乳を混し叉角砂糖一個を加へて飲料となす而してコーヒーはアラビヤ產を一等販賣店は京橋區竹川町龜屋

◎第廿五問(長州萩松本君)　コンデンスミルクは亞米利加舶來を最可とす、歐羅巴製も惡しきにあらねど赤道直下を經過すれば偶々腐敗の恐あり、商標は鷲印を最可とすれど、幾十種の摸倣品あり、素人は信用ある商店に就きて購求することそ得策なれ

◎第廿六問(神田猿樂町漫遊君)　夏期漫遊中のシヤツは英國製のフランネル第一位なり、永の道中汗をはぢくの效あるのみならす、流汗瀧の如き後旅宿に就きては之をしぼりて室內に懸け置く時は、明朝は十分元の如く乾き、決して近時流行する木綿縮の一度汗に濕へばぐたくと鹽氣つく比にあらず、こは實驗よりの答辯にして着して熱を感ずるとも夫の木綿縮と大差あることなし

◎第廿七問(朝日山某君)　小兒等が往々食事の際咽喉へ魚骨を刺すことあり、此際飯塊を嚥下せしめて容易く治し得れども、其者の鼻腔を壓し大きく口を開かしめ指頭叉は鉗子(醫の道具)にて拔き取るべし、併し素人にて困難と思はゞ速かに醫治を乞ふべし

◎第廿八問(岡山市柳田君)　救助者は神速に衣服を脫すべし次に溺者尙水中にありてもがきうごく時は安靜なるに至るまで數秒時待ち居るべし安靜なるに及び救助者は溺者の背部より頭髮を固持し岸に向ひ游ぎ來るべし若し海中に於てその潮流の退んとするとき直ちに陸地に達せんことを勉むるは最大の過失なりとすこの時は自ら仰向となり自身はその溺死躰と平均浮游するを度とし、その救助を得るに至る迄自然に任すべし潮に逆ふときは救助者も終に溺ることとあり

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

◎第二十九問（小石川表町呑水君）　英國の女優に「ラングトリー」なるものありて絶世の美人なりとかや彼は己れの容色の變らざらんを望み百方手を盡したりしもその効なかりしに一日波斯のある新聞にてこの秘密方法を見たり彼は之を見て實驗せしに功ありしと云ふその方法とは犢牛の生肉を面に塗なり云々併し編者は之を實驗したることなけれども風説のまゝ記す先づ朝夕この法を行ひ好き石鹼にて洗ふべし又近來牛乳にて顔を洗ふの法も行るゝとか

躰に皺の生ずるは皮膚の作用にして筋肉弛緩すれば起るものにして例へば一升袋に一升のものを容れをけば皺の生ずることなきも一升以下なれば皺を生ずるものなればその内容物に關係するなり故に老人となり筋肉衰耗するときはいかで皮膚に皺襞を生ぜずして居らんや

◎第卅問（小石川表町同君）　便通秘結の癖につきて左に答ふ甘水下劑を始め下劑は多くあれども藥劑を用ひずして便通せしむるは灌腸とて腸中に水液を灌注するを可とす、躰溫と同度の常水或は冷水を用ひ尙良きは水に石鹼を加へたるものなり通常灌腸液は五百「グラム」より千「グラム」の間なり又は飴を手掌にて少しく細くして之れを肛門に挿入するときは便通あるべしこれ又一種の灌腸なり秘結の癖ある人は食を整調するを以て功あり即ち豆莢粉製食物粗製パン「アルコール」分の多き火酒を禁じ牛乳牛酪蜂蜜等を用ゆべし

（四）



質問規則

本欄は家庭の實用に資するの目的なるを以て字義又は專門の學術技藝等に關する事件は答辨の要なし而して答ふべき質問は
一衛生に關する事譬へば小兒養育、養育の具、時候の衛生、疾病、治療法、藥劑、病院、看護等に關する質問
一教育に關する事譬へば小兒教育、教育書類、教育の品具、學校等に關する質問
一衣食住に關る事、必用諸道具又は臺所品の得失善悪、購買法廢物利用、素人料理、食品の購買法、其得失善悪、衣服の購買法、其得失善悪、衣服の取合せ法、時々の流行等即ち簡易生活及家事經濟一切に關する質問
一家庭的手藝に關する質問
一家畜又は園藝等に關する質問
一家庭理財に關する事譬へば貯金、銀行、保險等に關する質問
一職業に關する事譬へば内職又は婦人的職業に關する質問
一其他家庭實用に關する諸種の質問

社告

次號第百六號の寄書百珍問題は佐の如し

『家庭的避暑法』

如何なる家庭如何なる人にても年々家庭的避暑の最良手段あるへし
曰く湯治曰く海水浴曰く舟遊曰く旅行曰く山遊曰く何々曰く何々所謂家庭外の避暑法は多く且つ世に紹介せられたり
吾社此問題を掲ぐる目的は如何にして容易に、安樂に、愉快に家庭内の避暑法を行ふのかにあり要は家庭的避暑法の最上手段を掲ぐるにあれば一行にても十行にても可及的簡單なる寄書こそ望ましけれ多種及多數を臚列して愛讀諸君の一燦に供せん

八月七日發行の



第參百六拾號に添ゆ

○未定　尾崎紅葉

洗錬痩勁の文字、容易に得べからざる隨筆なり、

○未定　川上眉山

眉山君の構想高妙にして、文藻富贍なる市に定價あり、其小説の佳作なるは、喋々を要せざるべし、

○夜叉王　饗庭篁村

大磯の虎が母の事を歴史小説風に捻られたるものにて、先生自らいつもの洒落のめし物とは勝手が違ふと申されたり、

○島叟物語　吉田義靜

佛文に達したる吉田君の飜譯小説なり、原文を讀まざる人にも面白く、原文を讀みたる人には更に面白し、

○片鶉　金子春夢

春夢君の小説、趣向に無理なく、淡々事實を叙し去りて、其中に自ら妙味の津々たるものあり、

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

舶來煙草直輸入商

バットルアックス	カメオ	ピンヘッド
ブイ入賣價七錢	賣價九錢	賣價四錢



品種	銘柄	入數
紙巻	エンチヤンテレス	百本入 廿本入 十本入
紙巻	ピオー	十本入
トルコ紙巻	ルキゾール	十本入
紙巻	スター	十本入
刻莨	ゴールデン	二弖入
刻莨	プリシラー	二弖入
刻莨	ジヨウカー	二弖入
刻莨	ジブシー	二弖入 四弖入
刻莨	バタフライ	四弖入
刻莨	カメオ	四弖入
刻莨	リッチモンド	二弖入 四弖入 八弖入

東京新橋 **江副商店** (電話本局九〇五)

(明治廿五年九月十四日遞信省認可)(明治三十年七月廿五日發兌)東京市京橋區西紺屋町二十六七番地 株式會社秀英舍印行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA